

# 中国における都城の概念の変化と日本の宮都

豊田裕章

大阪府立豊中支援学校

## はじめに

本稿は、中国の漢代から隋唐時代の都を宮、城、郭という三重の空間構成から考察し、隋唐時代に都城の概念が城の内部だけでなく郭までを含むように大きく変化したし、それにとまなう混乱が日本の宮都の空間構成に本質的な影響を与えたという問題について述べたものである<sup>(1)</sup>。

漢代から隋唐時代の都に関しては、今まで数多くの研究がなされている。しかし、城（内城）と郭（外郭）を区別して考察した研究は多くはない。その数少ない研究には、次のようなものがある。

五井直弘氏は、前漢の長安、後漢の洛陽の性格を内城的なものとしてとらえ、その城外に一般の居住者の住む郭という集住域が存在したことを推定した。ただし、漢代の長安や洛陽は、内城にのみ城壁がめぐらされた構造であるとして、郭の区域をめぐる郭壁の存在については否定的である。そして、北魏時代になって初めて、内城の城外にある郭の区域を囲む郭壁が造営され条坊制も採用されたとする。さらに、このような新しい北魏洛陽の形式が隋唐の長安や洛陽に受け継がれたとしている。なお、五井氏は都城が郭を含むかどうかという問題については特に論及していない（五井直弘 1987）。

楊寛氏も中国の古代都城の基本的構造の変化に関して、城と郭という空間構成に着目して考察を行った。そして前漢の長安城を内城的性格のものとし、その城外の北部ならびに東北部に郭の区域を推定する。また後漢や北魏の洛陽城も内城的性格のものであり、その城外に郭の区域が存在することを指摘している。ただし、楊氏の研究は、内城も外郭も都城とする前提にたつて考察が行われている（楊寛 1987）。

中村圭爾氏は、南朝の建康に関して、水系との関わりも視野に入れて都市構造の復原を行い、宮城の周囲の6門が設けられた都市域が「都城」であり、最も外側の城壁のめぐらされた区域（外城）であるとした。そして、この「都城」の城外にも都市域が存在することを推定しているけれども、それが郭であるとは述べられていない（中村 1984, 1988, 2005）。

愛宕元氏は、中国の都市史を城と郭という視点から、通史的に詳細で精緻な叙述

を行っている。しかし、それぞれの時期における都城が郭までを含むかどうかという問題については特に言及はなされていない（愛宕元 1991）。

劉慶柱氏は、中国の殷周時代から秦漢時代までの都に関して、一般的に宮城と郭城の組み合わせからなり、宮城が都の中心であったとする。しかし秦漢時代以後の都は宮城、内城（あるいは皇城と呼ぶ）、郭城で構成されるようになり、都の配置構造に大きな変化があったとしている。なお、それらの都では、宮城と郭城、或いは宮城、内城、郭城のすべてを都城であるとしている（劉慶柱 2003）。

以上のような諸研究は、中国の漢代から南北朝時代の国都の構造を城（内城）と郭（外郭）から構成されたものとする点に留意して行われた数少ない研究である。しかし、これらの諸研究では、内城と外郭を合わせたものを都城とする前提に立って研究がなされ、都城が郭を本来含まなかったという問題については特に言及が行われていないように思える。

これに対し、中島比氏は、隋代から唐代への国都の変遷過程を、主として郭壁の問題を中心に検討し、隋代において京城の外周をめぐる郭壁は容易に越えることのできるような短垣程度のもので、唐代になって始めて堅固な郭壁が造営されるようになったとする。そして、北魏の洛陽について、『魏書』巻 63 の王肅伝にみえる太和 20 年（496）の記事で「京城」と記されたものが後に内城とされる区域のことであることを指摘した。また、北魏の国都洛陽の内城の城外にある郭の区域にあたる地域を「城邑外」とする。ただし、このような問題についてはごく簡単にふれているだけで詳しい考察はなされていない。また「城邑」という言葉が用いられているけれども、その「城邑」とは具体的に何であるのかということについての説明はなされていない。（中島 1985）。

外村中氏は、前漢の長安、北魏の洛陽、北齊の鄴や南朝の建康という都を、宮城、都城、外郭という三重の構造をとる都市であり、これらの都で都城に外郭は含まれないことを指摘した。そして隋唐の長安では宮城に皇城をあわせたものを、都市としての機能から都城とみなすことができるとした。外村氏の見解も内城を都城とする見解である。ただし、唐代においても基本的には内城を都城とする構造であるとみる（外村 1998）。

盧海鳴氏も建康の構造について、宮城、都城、外郭からなるものとし、内城的な区域を都城とみなしている（盧海鳴 2002）。

佐原康夫氏は、前漢の長安城を都城として位置づけ、その長安城が前漢末期から王莽時代にかけて、儒教的な天子の都として新たに整備される中で、戦国以来の「王家のみやこ」から礼教主義的な国家秩序の中心へその性格を変化させ、それが後世の儒教的都城に向けた下準備の役割を果たしたとする（佐原 1995, 1999, 2002）。



なお、岸俊男氏は、日本の都城に関してではあるが、内城に相当する通常宮域とされている区域を本来の都城とみる試案を提起していた。ただし、この問題に関しては試案としての提起にとどまり、その後の岸氏自身の研究の中でも、この観点に立って展開をすることはなされていなかった（岸 1976）。

これらの研究は、中国の前漢の長安や北魏の洛陽、南朝の建康などの都について、内城を都城とする見解である。また岸氏の研究は日本の本来の都城が内城にあたる通常宮域とされる区域のことであるとする。ただし、これらの研究では都城の概念について通時的にその変化を考察して、隋唐時代に郭（外郭）までを含むようになった問題については論及するようなことはなされていなかった。またその中国における都城の概念の変化という大きな問題が、日本の都城の構造に本質的な影響を与えていることに関する考察もなされていなかった。

ところで、筆者は、1998 年からの一連の論考で、中国の漢代から南北朝時代の都について、宮の区域、城の区域、郭の区域という三重の空間構成からなるとみる観点から考察を行った。そして、都城の概念が隋代から唐代初期を過渡期として、宮を内包する城の区域の内部（内城に相当する）のみをその範囲とするものから、やがて郭の区域（外郭域）までを含めるようなものへと大きく段階的に変化することを述べた。そして、古代の日本においては、内城である通常宮域とされている区域こそが本来の都城であり、そこに『周礼』などの中国の古典にみえる周制の王城（國）を志向した設計がなされている可能性についても述べた（豊田 1998, 2001, 2002, 2003, 2007-a）。また日本や中国の国都の構造で、12 門の存在やそれぞれの門の門道（扉口）が三つであることが、都城の重要な指標となる点についても指摘した（豊田 1998, 2007-a）。そして、平城京以後の都に唐制が重層的に受容されたが、周制を志向した構造が遺制として根強く踏襲されたことを述べた（豊田 2002, 2007-a）。

本稿はこれらの旧稿で述べた内容を総括し、また新たな考察を加えて、中国における隋から唐初にかけての都城の概念の大きな変化と、それが日本の古代宮都の空間構成に与えた影響についてまとめたものである。これは単に概念の問題にとどまらず、中国や日本における国都の空間構成や都市の本質に関わる問題であると考えている。なお、このような点については先述したような旧稿（豊田 1998, 2001, 2002, 2003, 2007-a）をあわせて参照していただければありがたい。また附論として、石清水八幡宮文書中に引用されている図の中に、中国でも既に失われた、後漢代の阮謐<sup>げんしん</sup>の撰になる『周室王城明堂宗廟図』の貴重な逸図である可能性のあるものが存在することについて、旧稿（豊田 2007-b）で述べた内容の抄録に新たな考察を加えたものを掲載した<sup>(2)</sup>。

# 1. 漢代から南北朝時代の都城

ここでは漢代から南北朝時代における主要な都である、前漢の長安、後漢や魏晋の洛陽、北魏の洛陽、南朝の建康を取り上げ、それぞれを宮の区域、城の区域、郭の区域という空間構成の観点から考察してみたい。

## ① 前漢時代の長安

前漢時代の国都である長安城は、その内部に未央宮<sup>びおうきゆう</sup>、長樂宮等の諸宮、住宅地、官署や武庫、西市、東市などが存在した。その周囲は城壁（基底部の幅約16m）で囲まれ、その城壁に12門が設けられていた<sup>(3)</sup>（図1）。なお、この長安城は内城的

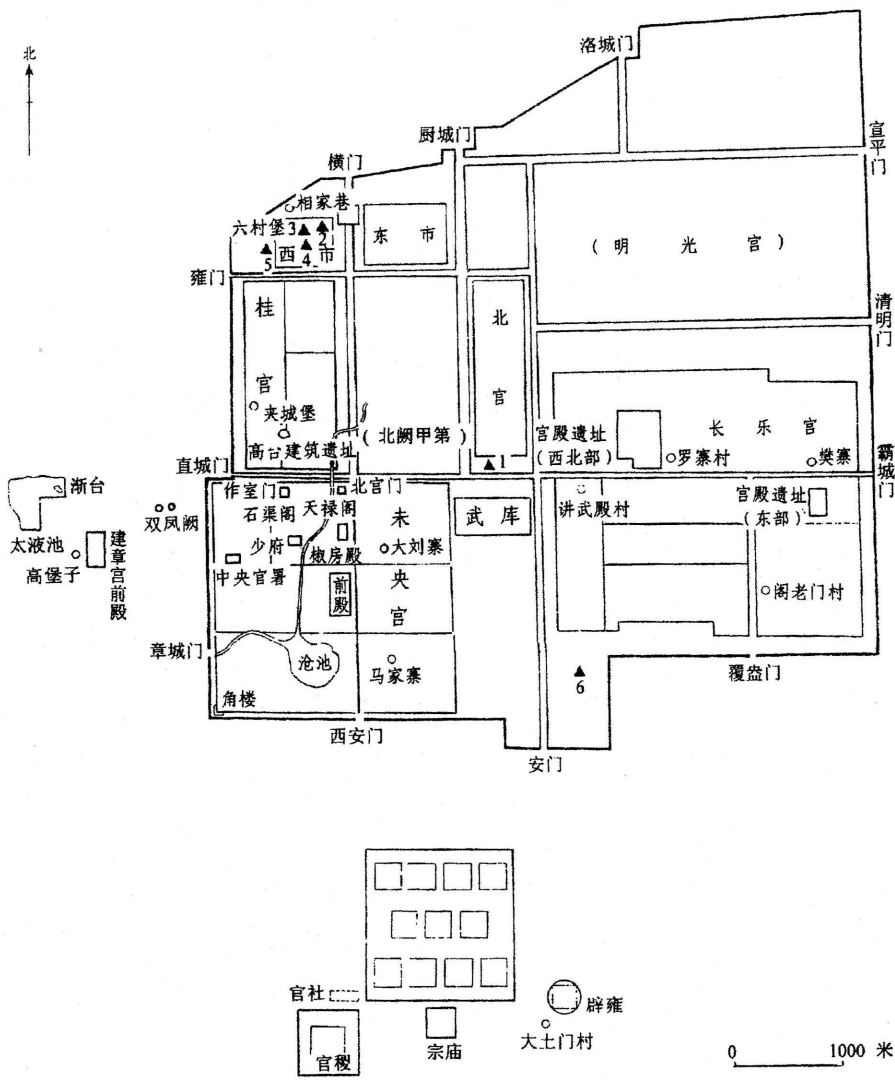


図1 漢長安城遺址平面示意图（劉慶柱，李毓芳 2003 より）

なもので、もともと宮室、官署、高官の住宅などの保全のために築かれたものであったということが指摘されている<sup>(4)</sup>。一般住宅地の多くはこの長安城の城外にあったとされる<sup>(5)</sup>。そして、長安城の城外に広がる一般の居住域は、『三輔黄図』の記載などから「郭」と呼ばれていたと考えられている<sup>(6)</sup>。

『三輔黄図』巻1では「都城十二門」と記し、12門のある長安城を都城とする記載もある。なお、都城である長安城の、城外に形成された都市域である郭の区域を囲む郭壁の存在については明らかではない。ただし『水経注』巻十九、渭水注では、「北頭第一門本名宣平門、一曰東都門…（略）…其郭門亦曰東都門」（北頭第一門、本は宣平門と名づく、一に曰く、東都門なり…（略）…其の郭門も亦、東都門と曰う）というように長安城の宣平門を俗称で東都門と称し、それに対応する外郭の門も同じく東都門と呼ばれていたと記している。このことからみて、郭の区域には門的な施設があった可能性がある。

ちなみに『三輔黄図』は漢の長安付近を記した歴史地理書で漢代の著作とされるけれども、南北朝時代や唐宋時代にも増補されていると考えられているので、その使用にあたっては慎重でなければならない面もある。また、『水経注』は北魏時代の酈道元の撰になる地理書である。

ところで、前漢代に劉歆が撰し漢の長安の制度や逸話などを収めたとされる『西京雜記』巻3には、「杜子夏葬長安北四里、臨終作文曰、魏郡杜鄴…（略）…封於長安北郭、此焉宴息」（杜子夏 長安北四里に葬る、臨終作文に曰わく、魏郡の杜鄴…（略）…長安北郭に封ず、此に宴息す）というように、前漢時代の人である杜子夏（杜鄴）の臨終作文が引用されている。

ここに引用されている臨終作文とは墓誌銘のようなもので、同時代的性格の強い史料であると思う。この史料には杜子夏（杜鄴）が亡くなった際に、長安城から北4里の地に塚を築いて葬ったことや、そこが「北郭」と呼ばれていた地域であったことが記されている。この記載から長安城の城北は北郭と呼ばれた区域であり、その一角には墳墓も存在したことが理解できる<sup>(7)</sup>。つまり長安城の城外に広がる居住区である郭の区域は、必ずしも人口が密集しているような区域ではなく、墳墓も混在するような近郊的な光景を呈する区域であったといえる。

以上のような前漢代の長安の構造を、宮の区域、城の区域、郭の区域という空間構成の視点からみると、前漢の長安では未央宮、長樂宮などの宮の区域があり、そのまわりに12門の配された城の区域（長安城）があり、さらにその外部に郭と呼ばれる居住区域が広がっていたと考えられる。前漢の長安においては、宮を内包する城の区域、つまり内城的性格が指摘されている長安城が、都（京）における城塞としての都城（京城）である。この内部には未央宮などの宮とともに官署や特定の人々

のための住宅地が混在していた。これに対し城外に広がる郭の区域は、いくらそこに居住域が形成されていても、そこは都城の城外であり、墳墓もその中に存在するような近郊的な区域として、都城に対して付随的な場所であったと考えられる。そのため長安城については数多くの史料が見られるのに対して、その外部の郭に関して言及したものはごくわずかである。

## ② 後漢から西晋時代の洛陽

後漢時代から西晋時代にかけての国都洛陽に造営された洛陽城の内部には、北宮や南宮のような宮室や、倉庫、官署などが建ち並んでいた。またこの内部には住宅地区や金市と呼ばれる市も存在したと考えられている。この洛陽城は、12の門が配置された重厚な城壁（残存幅で約14～30m）で囲まれ、それぞれの門の開口部（門

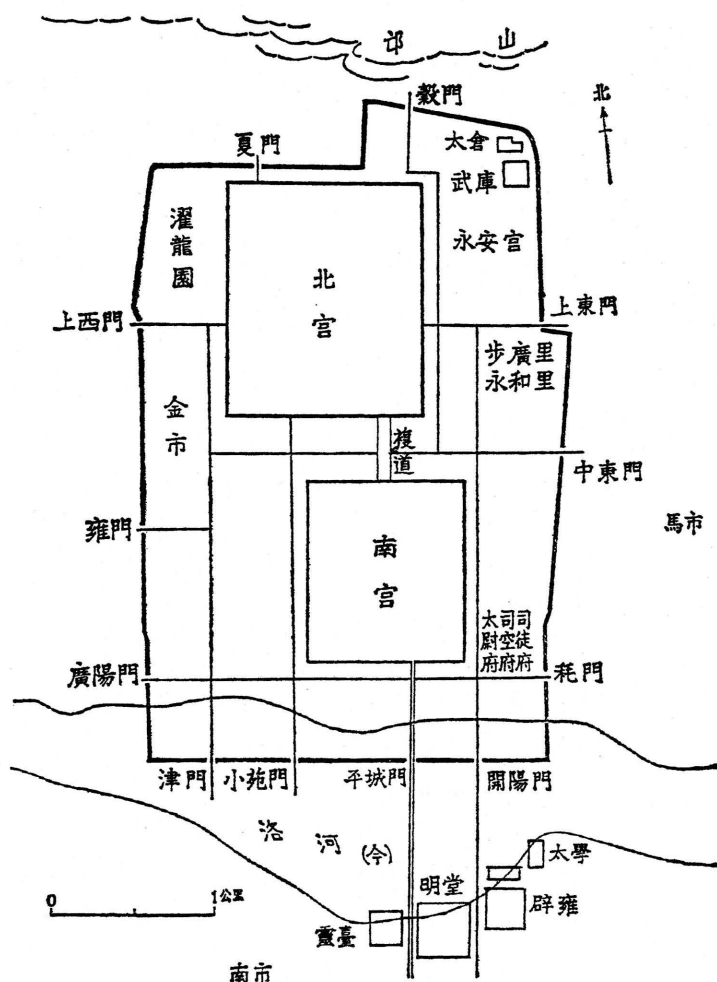


図2 東漢洛陽城平面図（王仲殊 1982 より）

道)は三つであった<sup>(8)</sup>。このような後漢の洛陽城の構造は、『周礼』冬官・考工記に記された理想とされる王城の構造に則っているとする指摘もかねてからある<sup>(9)</sup>(図2)。

『後漢書』巻69、何進伝には「紹等又為画策、多召四方猛將及諸豪傑、使並引兵向京城」(紹等 又画策を為し、多く四方の猛將及び諸豪傑を召し、並びに兵を引き、京城に向かわしむ)という記載がある。京城とは都城の同義語であるが、ここに見える京城(都城)は重厚な城壁を有する洛陽城のことであると考えられる。『文選』巻1に収められた班固の東都賦に「皇城之内、宮室光明、闕庭神麗」(皇城の内、宮室光明、闕庭神麗なり)とみえる皇城も、洛陽の京城(都城)の雅称であると考えられる。

ところで、この後漢の洛陽城も内城的な性格のものであったことが指摘されている<sup>(10)</sup>。『後漢書』志13、五行志には、董卓を風刺した靈帝の中平年間の京都歌に「遊四郭」(四郭に遊ぶ)という字句がみえ、後漢の洛陽城の城外四方に郭の区域が存在したことをうかがわせる。しかし、郭に関する直接的な記載は史料上にほとんどみられない。内城的な洛陽城の内部こそが都城(京城)として意識されていたため、その城外に広がる郭の区域は、付随的な場所として言及されることもあまりなかったのではないだろうか。

後世の史料ではあるが、『旧唐書』に後漢代の洛陽城に関して、都城の同義語である「國城」と表現している記載がみられる。それは、『旧唐書』巻22、礼儀志の中に「昔漢氏承秦、…(略)…孝武初、議立明堂於長安城南、遭竇太后不好儒術、事乃中廢…(略)…光武中元元年、立於國城之南」(昔漢氏 秦を承け…(略)…孝武の初、明堂を長安城の南に立てんことを議す、竇太后 儒術を好まざるに遭い、事乃ち中廢す…(略)…光武の中元元年、國城の南に立つ)とある記載である。これは、重要な礼制建築である明堂の造営を、前漢代に長安城の南に造営しようとしたが果たさず、ようやく後漢の光武帝の中元元年になって「國城」の南に建てることのできたという記載である。國城とは王城である都城の同義語である。後漢代の明堂は洛陽城の南に存在したことが考古学的にも判明していることからみて<sup>(11)</sup>、ここでの「國城」は内城的な性格が指摘されている洛陽城のことであると考えられる。このことは、後漢代における内城的な洛陽城を國城(都城)とする伝統的な認識が、唐代に至るまで継承されていたことをうかがわせる。

ちなみに後漢代の洛陽の郭の区域の外周をめぐる郭壁の存在については明らかではない。

ところで、洛陽は西晋代においても国都であった。この西晋代の洛陽における都城の概念を考える上で興味深い記載が、西晋末期の八王の乱や永嘉の乱に関わる『晋

書』のいくつかの記載の中にみられる。それは『晋書』巻4、恵帝紀の太安2年(303)9月丙申の条に「張方入京城、焼清明開陽二門」(張方 京城に入り清明、開陽の二門を焼く)とみえる。これは八王の乱の中で河間王配下の武将である張方が洛陽を攻撃し、その京城への入城に際し清明門、開陽門という二つの門を焼いたという記載である。京城とは都城の同義語であり、清明門、開陽門とは内城的な性格を有する洛陽城に開かれた門である。この記事の文脈からは、清明門、開陽門のある洛陽城が京城(都城)であることがうかがわれる。

『晋書』巻5、懷帝紀の永嘉3年(309)9月丁丑の条に「東海王越入保京城。聰至西明門、越禦之、戦于宣陽門外、大破之」(東海王 越 京城に入り保つ。聰 西明門に至る、越 之を禦ぐ、宣陽門外に戦い、大いに之を破る)とある。この記事には西晋代の懷帝の時に、東海王司馬越が京城(都城)を守備していた際に、攻め寄せた劉聰の軍を西明門や宣陽門という門で防戦したと記している。ここにみえる西明門や宣陽門も、内城的な性格を有する洛陽城の門であり、ここにいう京城(都城)も内城的な洛陽城のことであると考えられる。

以上のように後漢から西晋時代にかけての洛陽では、12門の配された内城的な性格を有する洛陽城(宮と城の区域に該当する)が都城(京城)であり、その城外に広がる郭の区域は都城(京城)には含まれない付随的な区域であったといえる。

### ③ 北魏の洛陽

北魏の国都洛陽については『洛陽伽藍記』に詳しい叙述がある。『洛陽伽藍記』巻1には内城である洛陽城の内部に、宮(宮城)とともに官署や永寧寺などの寺院や住宅地が混在していた様子が詳しく描かれている。この内城である洛陽城では、後漢以来の城壁が改修されて用いられていたが、その城壁(残存幅で14~30m)にはさらに1門が増修され、後漢代の洛陽より1門多い13門が開かれていた<sup>(12)</sup>(図3)。

この北魏の洛陽城の城外にも郭の区域が広がっていた。『洛陽伽藍記』巻2, 3, 4, 5によると、この城外の広大な郭の区域には、一般の住宅地のみでなく皇族や高級官僚の邸宅街や寺院も存在したことが記されている。なお、この郭の区域には郭壁(基底部の残存幅約6~13m)がめぐらされていたことも考古学的な調査によって明らかになっている<sup>(13)</sup>。

北魏時代の洛陽では、京(都)の概念には内城のみならず、その外部にある郭の区域も含まれていたようである<sup>(14)</sup>。しかし、これに対して都城の概念には次に述べるように郭の区域は含まれていなかったことが確認できる。

このことを明確に示す史料として次のようなものがある。それは、『魏書』巻114、釈老志の神龜元年(518)の任城王澄の上奏文に「故都城制云、城内唯擬一永寧寺

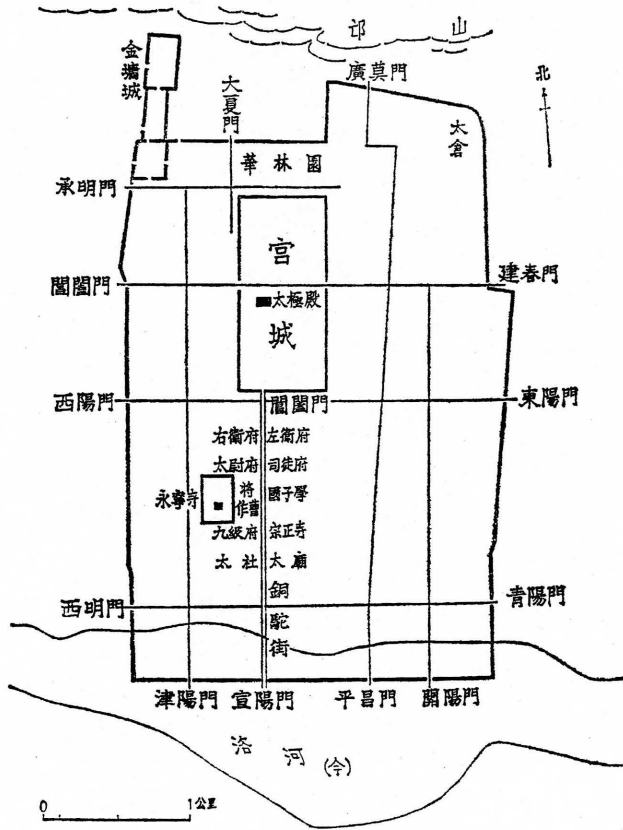


図3 北魏洛陽城平面図

(王仲殊 1982)

地、郭内唯擬尼寺一所、餘悉城郭之外」(故の都城の制に云う、城内は唯一永寧寺の地を擬し、郭内には唯<sup>ただ</sup>尼寺一所を擬す、餘は悉く城郭の外とす)とみえる記載である<sup>(15)</sup>。この記載からは、北魏洛陽では、もともと「城内」の区域には永寧寺1寺のみを、「郭内」の区域には尼寺1寺のみを造営し、これら以外の寺院は、すべて「城」と「郭」の区域の外、つまり京城の外(北魏では城と郭が京であることが確認できる)に造営するという方針であったことがうかがえる。この史料では続けて、次第に禁制を破るものが続出するので、それを是正するために、「輒遣府司馬陸昶<sup>ちやう</sup>、属崔孝芬、都城之中及郭邑之内檢括寺舍」(輒ち府司馬 陸昶、属 崔孝芬をして、都城之中及び郭邑の内、寺舍を檢括せしむ)とあるように、陸昶、崔孝芬に命じて京内の寺院の実態調査を行わせたことが記されている。その結果、空地に建設予定のものを除外しても、既に京内に500ほどの寺院があり、民が法を畏れないためこのような状況に至ったと記している。

この史料は北魏時代の国都における寺院建設の規制とそれが無視された実情を如実に示す貴重な史料である。それとともにここにみえる記載の中に「城内」と「郭



内」という対になる言葉が、他の部分では「都城之中」と「郭邑之内」という言葉で表現されていることが注目される。つまり「城内」は「都城之中」のことであり、「郭内」とは「郭邑之内」であるということになる。

このことから、北魏の国都洛陽では、内城である城の区域の内部（城内）が「都城」であり、その城外にある郭の区域（郭内、郭邑）は都城には含まれなかったことがうかがえる（図4）。

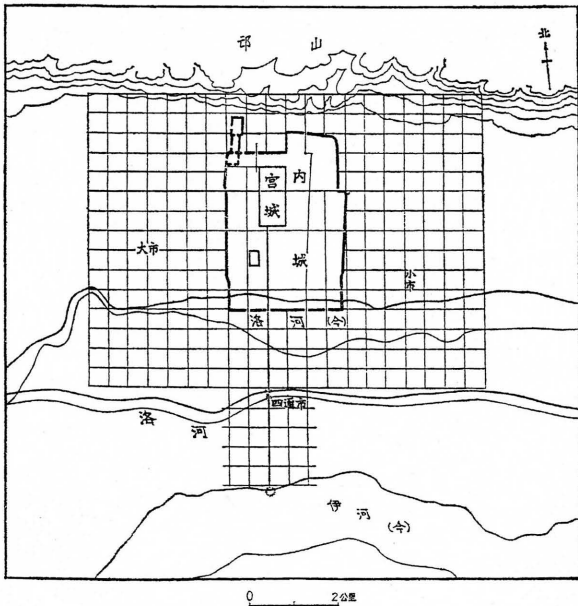


図4 北魏外郭城平面図

（王仲殊 1982）

（外郭の外縁は、この図では直線的に描かれているが実際はいびつなものであったようである。）

#### ④ 建康

南朝の国都である建康では、宮の区域は、宮城もしくは台城と呼ばれ、雉堞（防御用の鋸壁）も備えた堅固な城壁で囲まれていた。

この宮の区域である宮城の外部には、牆壁で囲まれ6門が設けられ、「都城」、「都牆」或いは「六門之内」などと呼ばれる内城的な区域があった<sup>(16)</sup>。この区域の内部には官署とともに、皇族などの住宅地もあったことも推定されている<sup>(17)</sup>。ただし、『隋書』巻7、礼儀志には、この内部について、「六門之内、士庶甚多」（六門之内、士庶甚だ多し）とあり、士人のみでなく庶人も居住していたようである。

唐の許嵩の撰になる『建康実録』巻7にみえる、東晋の成帝の咸和5年（330）6月の条の注には、「六門、按地輿志、都城周二十里一十九步…（略）…晋江左所築、但宣陽門、至成帝作新宮、始修城、開陵陽等五門、與宣陽爲六、今謂六門也」（六門、地輿志を按ずるに、都城の周二十里一十九步なり、…（略）…晋江左に築く所は、<sup>ただ</sup>但宣陽門のみなり、成帝に至りて新宮を作り、始めて城を修め、陵陽等の五門を開

き、宣陽と六となす、今 六門と謂うなり）という記載がある。この記載には、『地輿志』という文献を引用して晋室の南渡後、江左（長江下流の南岸）に築かれた南朝の国都建康の周回 20 里の都城には、もともと宣陽門 1 門のみが開かれていたとある。やがて東晋の成帝の時に至って、その「都城」の周囲に陵陽などの 5 門が新たに開かれ、以前からあった宣陽門と合わせて 6 門になったという（図 5）。

また、同じく『建康実録』巻 7 の成帝の咸康元年（335）4 月の条の「帝親観兵於広陽門」（帝 親しく兵を広陽門に観る）という部分の注では、「広陽門…（略）…都城南面西門也」（広陽門…（略）…都城の南面西門なり）とする。広陽門は 6 門の

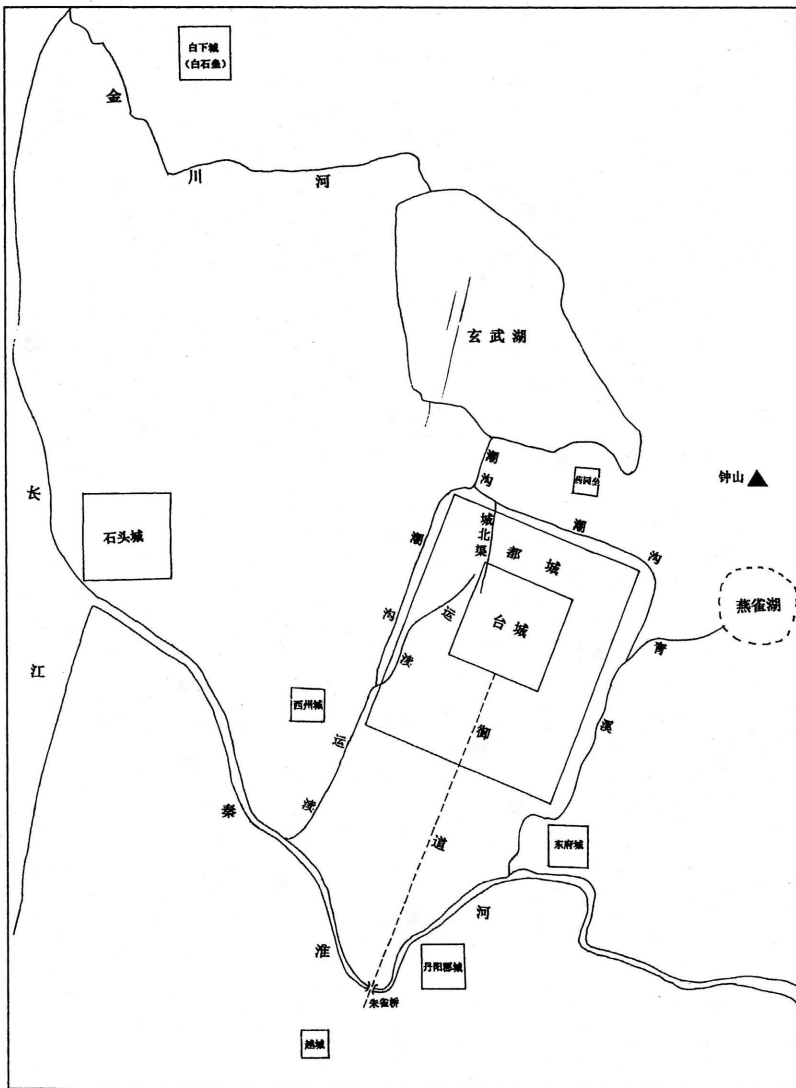


図 5 六朝建康城堡郡壘示意图（盧海鳴 2002）

一つである陵陽門を改称した門であり、これが「都城」の南面西の門であるとされている（同書、巻7、咸和5年6月の条の注）。この記載からも6門の設けられた範囲の内部が、当時都城と認識されていたことがわかる。

『宋書』巻15、礼志には「宋文帝元嘉十三年七月、有司奏、…（略）…其六門内、既非州郡県部界」（宋文帝元嘉十三年七月、有司奏すらく、…（略）…其れ六門の内、既に州郡県の部界にあらず）という史料がある。これは、南朝宋代に、6門の設けられた都城の内部が、州郡の管外、即ち民政の対象外の特種な区域であったことを示す特筆に値する史料である。これは、都城の本質に関わる重要な記載であると考えが、その問題については後で詳しく所見を述べたい。

ところで、この南朝の建康においても、都城の外部には広大な居住区域が広がっていた<sup>(18)</sup>。そして、それは「郭」と称されていたようである<sup>(19)</sup>。建康における郭の区域は、庶民の住宅とともに官僚の邸宅も多く営まれ、それらの中には高級住宅街を形成していたところもあったと考えられている<sup>(20)</sup>。また、この郭の区域の周囲は、南籬門、東籬門、石井籬門などの籬門と呼ばれる、おそらく簡素な構造の門が随所に設けられ、土塁や竹の植栽のようなものによって外部の地域と画されていたと推定されている<sup>(21)</sup>。

『太平御覧』巻197に引用する『南朝宮苑記』の逸文に、「建康籬門、旧南北両岸、籬門五十六所、蓋京邑之郊門也、如長安東都門、亦周之郊門也」（建康籬門、旧南北の両岸にあり、籬門五十六所なり、蓋し京邑の郊門なり、長安の東都門の如し、また周の郊門なり）とあるように、これらの籬門は建康を貫流する秦淮河の南北の広大な範囲に、56箇所にわたって設けられていたという。そして、この記載では、建康の籬門について、前漢の外郭の門として『三輔黄図』にみえる内城と同じ名称の外郭門である東都門や、さらに遡及して西周の近郊の区域の門である郊門と同様、京（都）における郭門であり、且つ郊門に該当するものであるとする。この記載では、籬門が、郭の区域の門である郭門にも、また近郊の門である郊門にも相当することから、南朝の国都建康では都城の城外で籬門に囲まれるまでの広大な範囲を、郭の区域であり、しかも近郊としての郊であるとする認識が存在したことがうかがえる。つまりこのことから、建康の郭の区域は郭であるとともに郊でもあったということを看取できる。

この建康の郭の区域の性格を、端的に「郊郭」という言葉で記載している事例がある。それは『南齊書』巻7、東昏侯紀に「郊郭四民皆廢業」（郊郭四民皆業を廃す）とあるものである。これは南朝の宋の皇帝であった東昏侯の暴政によって、国都建康の郊郭に居住する士農工商の四民が、困窮の極に至っていた様子を記したものである。同様の記載が『建康実録』巻15にも「郊郭四民廢業」（郊郭四民業を廃す）

としてみえる。ここにいう「郊郭」とは、建康の都城（都牆）の城外に広がる郭の区域のことであると考えられる。

儒教にみえる入れ子状の同心方の世界観では、王城（都城）の城外には近郊、さらには遠郊というような区域が次々にその外部に広がっていく。この中で郭の区域は、当時の観念では都城の城外を囲む近郊に形成された一種の集住域となる。そのため、都城の城外の郭の区域は、本来近郊の一部である郊として認識され、また郊に形成された都市域である郊郭として表現される場合もあったのではないだろうか。

以上のように、南朝の国都である建康においても、宮の区域を内包する城の区域の内部、つまり内城の内部が都城であり、その外部を取り巻く郭の区域は都城の城外の近郊と重なるような、郊郭と表現されるような区域であったと考えられる。

ところで、梁の武帝の天監年間には、このようなあり方に変革が試みられる。それは天監3年（504）に尚書左丞という高官であった何佟之によって、籬門が設けられたラインまでの範囲、つまり郭の区域までを含めた範囲を都城に含めるような解釈が武帝に提起されたことである。このことは『隋書』巻7、礼儀志に、「天監三年、尚書左丞何佟之議曰…（略）…案礼國門在臯門外、今籬門是也」（天監三年、尚書左丞何佟之の議に曰わく…（略）…礼を案ずるに國門は臯門の外にあり、今の籬門 是なり）とある。都城の門である國門とは、王城としての都城の門のことである。何佟之は郭の区域の門である籬門が國門に相当するとして、建康における郭の区域の外周の籬門のラインまでを都城とみなすべきだと提起した。この何佟之という人物は『梁書』巻48、儒林伝に「高祖踐祚、尊重儒術、以佟之爲尚書左丞、是時百度草創、佟之依禮定議、多所裨益。」（高祖踐祚し、儒術を尊重す、佟之を以て尚書左丞と爲す、是の時百度草創す、佟之 禮に依りて議を定む、裨益するところ多し）とあるように梁の武帝の天監の制度改革に大きな影響を与えた人物である。

この何佟之の見解は天監7年（508）に次のような形で実現される。『梁書』巻2、武帝紀、天監7年2月己卯の条に「新作國門于越城南」（新たに國門を越城の南に作る）とある。越城は建康の籬門のライン上の地名であり、これは何佟之の提起に依拠するように、郭の外周に都城の門を意味する「國門」を新たに建設したこととなる<sup>(22)</sup>。これは籬門の設けられた郭の区域までの範囲を都城とする認識を、梁の武帝が受容したことを、國門の建設によって視覚的な形で表現したものといえる。

ただし、この國門の建設は1門のみであったようで、他の籬門は同じライン上にありながら、都城の門である國門として改修や改称をなされることはなかったようである。

そのことと関係するように、籬門を近郊の門である郊門とするような認識、つまり郭の区域を都城の城外の郊であるとする認識が、國門建設以後も根強く併存して

いたことを示す史料が、先述した『太平御覧』が引用する『南朝宮苑記』の逸文の中にみえる。それは、「籬門五十六所、蓋京邑之郊門也」（籬門五十六所なり、蓋し京邑の郊門なり）として、東西南北の主要な籬門を示す中に、「南籬門は國門の西にあり」と記載するものである。これは、郭の外縁の門について、都城（國）の門である國門とする表記と郊の門であるとする表記が同じ記事の中に併存していることを示している。つまり、このことから、籬門の設けられた郭の区域までを都城とみなすような新たな認識と、この区域を都城の城外の近郊区であるとする伝統的な認識が併存する、梁朝の天監年間以後のいわば過渡的ともいえる様相がうかがわれる。

これは、梁の天監年間に制度改革が行われ郭までを含める新しい都城の概念が導入されたけれども、郭を都城に含めないで都城の城外の近郊の区域と重なるとする、伝統的な認識が根強く存在していたことを示していると思われる。

梁の天監年間にみられる、郭までを含める新しい都城の概念の受容を視覚的に示した國門の造営は、1門のみの造営ではあるけれども、次章でみる隋代の様相の先駆的な試みと考えることができる。このような新しい試みを萌芽的なものとはいえ行うことができたことの背景の一つに、南朝の經学が北朝に比して柔軟な解釈を行える土壌を有していたということも影響しているであろう。

天監の礼制などの制度改革は、それまでの礼制議論の成熟を受けて、より洗練された天子を頂点とする秩序を構築し、隋唐王朝に大きな影響を与えたとされる<sup>(23)</sup>。隋代の大興の設計プランに、梁の武帝の天監年間に何佟之によって示された萌芽的ともいえる新しい都城の概念が、発展的に継承された可能性が考えられる。

## 2. 隋唐時代における都城の概念の変化

### ① 都城の概念の変化の過渡期としての隋代から唐初

隋代には、漢代以来の長安城の東南に新たな造営プランで国都大興が文帝によって築かれた。また洛陽も漢魏以来の洛陽城とは位置を異にして新たなプランで煬帝によって造営された。隋代に新たに造営された大興と洛陽は、唐代にそれぞれ唐の国都である長安、洛陽として継承されることになる。

ところで、隋代の国都大興（唐代に長安と改称される）では、いくつもの画期的な構造上の変革がなされた。その重大な変革点の一つとして、宮の区域である宮城と城の区域である皇城が、従来の王朝の国都でみられるような入れ子状の構造ではなく、連結されたような構造となったことがある（図6）。

そしてもう一つの大きな変革点として次のようなことがある。それは既に北宋時代に編纂された『長安志』巻7で、著者である宋敏求が端的に指摘していたことで

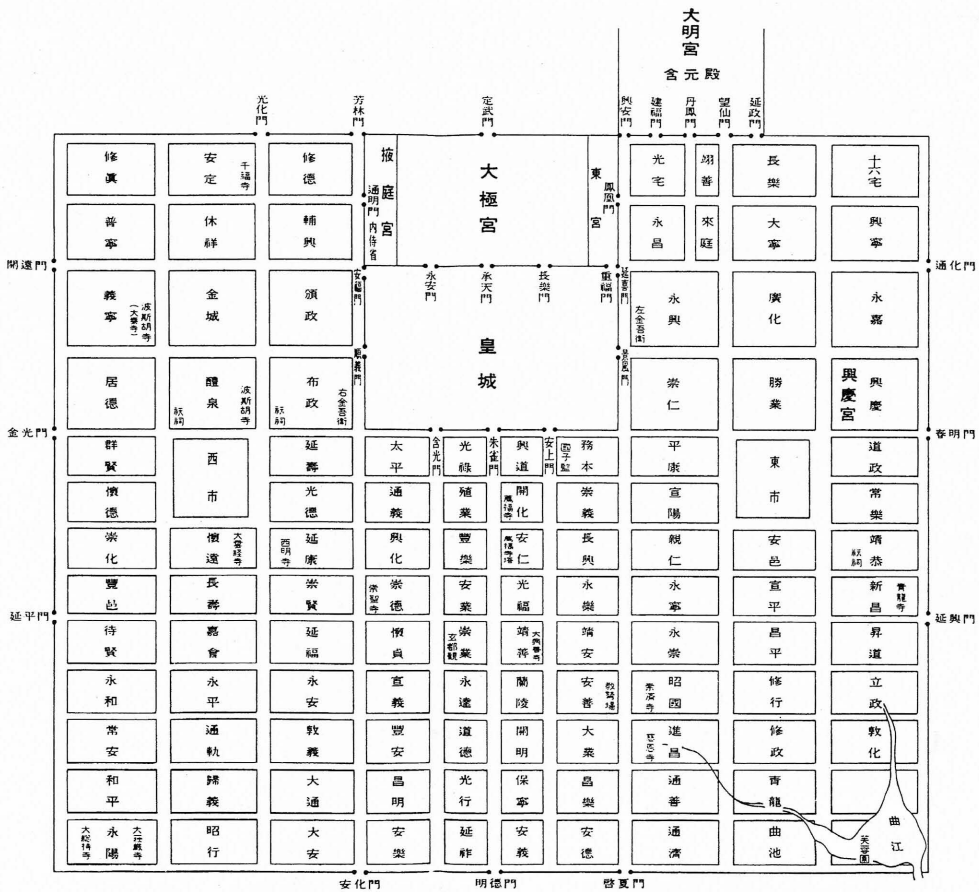


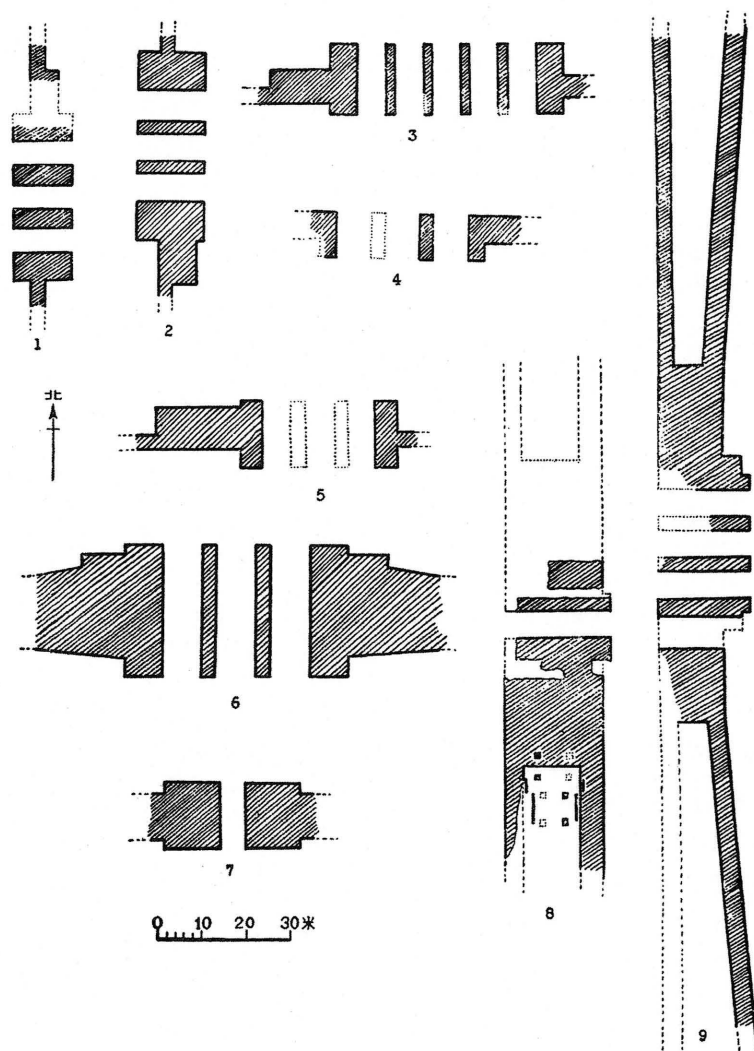
図6 長安城図(平岡武夫 1956)

あるが、「自兩漢以後，至於晉齊梁陳並有人家在宮闕之間，隋文帝以為不便於民，於是皇城之内，惟列府寺，不使雜人居止。公私有便，風俗齊肅，實隋文新意也」（兩漢以後，晉齊梁陳に至るまで，並びに人家，宮闕の間にあり，隋の文帝民に便ならずと為すを以て，是において皇城の内，ただ府寺のみを列し，雜人をして居止せしめず，公私に便あり，風俗齊肅たり。実に隋の文の新意なり）という点である。

つまり前漢そして後漢の時代から晋，南齊，梁，陳という南北朝時代に至るまで，内城である城の区域の内部には宮と住宅が混在していたような状態であったものを，隋の文帝が皇城の内部を府寺（ここでいう寺は官署のことで寺院ではない），即ち官署のみの区域となし，住宅が混在することを禁じたということである<sup>(24)</sup>。宋代の宋敏求は，このような国都の構造の大改革を文帝の発案によるものとしている。しかし，実際は将作大匠であった宇文愷等の発議による部分が大きいであろう。このような隋の大興における構造上の大改革のため，城の区域を継承する皇城は，住宅地

としての性格がなくなり純粋な官署街となった。

さらにもう一つの大きな変革点として、大興の宮城（宮の区域に相当）と皇城（城の区域に相当）の内部に住宅地区が一切設けられなくなった結果、その外部にある郭の区域のみが京内における唯一の住宅地区となったことがある。前漢代から南北朝時代の国都では、住宅地区が郭の区域だけでなく内城の区域の内部にもあった。しかし、隋代の大興（唐の長安）では内城にあたる宮城や皇城には住宅地区は一切設けられないでグリッドプランで区画された郭の区域のみが住宅地区となった。



圖一 唐長安城各門探測平面圖

- |        |             |        |        |        |
|--------|-------------|--------|--------|--------|
| 1. 金光門 | 2. 延平門      | 3. 明德門 | 4. 安化門 | 5. 啓夏門 |
| 6. 丹鳳門 | 7. 元武門(大明宮) | 8. 春明門 | 9. 延興門 |        |
- (斜線表示発土)

図7 唐長安城各門実測平面図（陝西省文物管理委員会 1958）



隋の大興の郭の区域をめぐる郭壁自体は、北魏などのものと比べても基底部の幅など構造面であまり変化はなく、隋代の大興で特に堅固なものにされたという形跡はない。例えば大興（長安）の金光門や啓夏門などの考古学的な調査による遺構図（図 7）をみると門の部分は幅も比較的広いが、それに接続する郭壁自体の幅は約 4 m 程度しかないことに気付かされる。

なお大興では、それまでの都では不整形になりがちであったと考えられる郭の区域の外周ラインが直線的な整形となり、東、西、南の各面に三つの門が整然と配置されている点も注目される。これは王城の重要な指標として『周礼』冬官・考工記にみえる「旁三門」（王城の各面に三つずつの門を配置するということ）をふまえているように思われる<sup>(25)</sup>。つまり大興の構造プランは、郭の区域までを王城である都城（京城）とみなすような形で全体の設計がなされている部分が強く存在するのである。

このような隋の大興の構造は、それまでの王朝以上に、皇帝権の強化をはかる隋朝の政策に対応した構造であるといえる。漢代から南北朝時代の王朝の国都では、各官署は、辟招制という一種の独自の官僚採用権を有し、比較的皇帝権から独立した性格もあった。このためもあって国都の中で各官署が分散しがちであり、或いは比較的集められている場合もゆるやかな集中のあり方であった<sup>(26)</sup>。これに対し、隋では、皇帝の膝下である宮城の南側に、皇城と通常呼ばれる広い面積の区域に、官署を整然と集中させて、皇帝にとって機能的な官署街としている。

これは、科挙という皇帝による官僚採用の一元化や中央官署に対する皇帝の支配権の強化という政策に応じた構造であるといえる。また漢代から南北朝時代の内城の内部は、一部庶民の居住もみられるが、本来皇帝の宮や官署や特定の人々の居住地を守るための城塞であった。しかし、隋代にはここを宮城と皇城という形で、皇帝の宮と官署のみの区域となし、住宅地を郭の区域のみにした。このことにより、皇帝が特定の階層を介さずに直接的に一般民衆に接するという姿勢を、国都という王権の志向するものが最も象徴的に示される場所で表現したものともいえる。

隋都大興の構造におけるこのような大きな変革に対応して、隋代には都城の概念も大きく変化したようである。この問題を『隋書』の記載をもとに、都城と同義語である京城や國城という言葉にまで広げて考えてみたい<sup>(27)</sup>。

『隋書』巻 80、陸讓母伝には、文帝の仁寿年間（601～604）のこととして、「上於是集京城士庶於朱雀門」（上、是において京城の士庶を朱雀門に集む）と記されている。これは「上」即ち、隋の文帝が「京城」の士人と庶民を朱雀門に集めたという記載である。隋代の大興では、内城に相当する宮の区域（宮城）や城の区域（皇城）の内部に士人や庶民の居住するような区域はないので、ここにいう士人や庶民

の住む「京城」はグリッドプランの施工された郭の区域も含めたものであると考えられる。したがって、この記載にみられる京城の概念には郭の区域までの範囲が含まれていることになる。このことは、隋代において、国都の構造の大改革にともない、都城の同義語である京城の概念が南北朝時代以前と異なって、内城である宮や城の区域のみでなく、郭の区域までを含むように大きく変化していたことをうかがわせるものである。

『隋書』巻 29、地理志の京兆郡の条には、「城東西十八里一百十五歩、南北十五里一百七十五歩、東面通化、春明、延興三門、南面啓夏、明德、安化三門、西面延平、金光、開遠三門、北面光化一門、里一百六、市二」（城の東西は十八里一百十五歩なり、南北は十五里一百七十五歩なり、東面には通化、春明、延興の三門、南面には啓夏、明德、安化の三門、西面には延平、金光、開遠の三門、北面には光化の一門なり、里は一百六にして、市は二つなり）とある。ここで「城」として記される範囲は、『旧唐書』巻 38、地理志にみえる唐の長安の郭域までを含めた範囲の「東西十八里一百五十歩、南北十五里一百七十五歩」という数値とほぼ同じである。またそこに開かれた門名は唐の長安の郭の区域に設けられた門名と同じである。つまり『隋書』巻 29、地理志にいう隋の国都大興における「城」とは、郭の区域までを含めたものであることが理解される。このように『隋書』巻 29、地理志の記載には郭までを含めた範囲を「城」（都城、京城）とする認識がうかがえる<sup>(28)</sup>。

しかし、今までみたような事例とは異なって、同じ『隋書』の記載の中にありながら、漢代から南北朝時代にみられるような、郭を含めない伝統的な都城の概念に依拠した記載がなされていると考えられる部分がある。

それは、次に述べる『隋書』巻 7、礼儀志にみえる国都大興の周囲に設けられた国家的な祭祀を行うための壇の位置についての記載である。そこには「國城東南七里延興門外、為靈星壇」（國城の東南七里の延興門の外に、靈星壇を爲る）や「隋制…（略）…國城東北七里通化門外為風師壇…（略）…國城西南八里金光門外為雨師壇」（隋制…（略）…國城の東北七里の通化門の外に風師壇を爲る…（略）…國城の西南八里の金光門の外に雨師壇を爲る）、「開皇初…（略）…又於國城東南七里延興門外爲靈星壇」（開皇初…（略）…又國城東南七里延興門外において靈星壇を爲る）というように記している。

これらの『隋書』巻 7、礼儀志の記載は、都城の同義語である「國城」を基準にした方向と距離によって国家的な祭祀壇の位置を示したものである。ここにみえる延興門、通化門、金光門などの諸門は、先にみた『隋書』巻 29、地理志にみえるような、隋の国都大興の郭の区域に設けられた門である（これらの諸門は、唐の長安にもそのまま継承される）。

『隋書』巻7、礼儀志の記載では、延興門の外にある靈星を祀る壇について、國城（都城）から東南に7里離れた位置にあるとし、通化門の外にある風師を祀る壇について、國城の東北に7里離れた位置にあるとし、金光門の外にある雨師を祀る壇について「國城」の西南に8里離れた位置にあると記している。先述したように延興、通化、金光門は、隋の大興の郭壁に設けられた門である。これらの祭祀のための壇はそれらの諸門の門外付近にあったようなので、この礼儀志に記載された隋の大興における國城（都城）とは、それらの諸門との位置関係からみて、内城である宮城と皇城のことであると考えることができる。

この『隋書』巻7、礼儀志の記載からみると、隋の大興では内城である宮城（宮の区域）と皇城（城の区域）のみが都城である國城と考えられ、その外部に広がるグリッドプランの施工された住宅地区である郭の区域は含まれていなかったことになる。これは先述した、『隋書』巻80、陸讓母伝でみた都城の同義語である京城の概念が郭を含むように変化していたことをうかがわせる記載や、巻29の地理志で郭までの範囲を都城に含めているような記載と大きく矛盾していることになる。

『隋書』の帝紀と列伝は貞観10年（636）に完成したものであるけれども、礼儀志や地理志などの志の部分はそれとは別個に貞観15年（641）に編纂が開始され高宗の顕慶元年（656）に『隋書』に編入されたものである。『隋書』の中で編纂過程が異なる列伝と志との間だけでなく、同じ編纂過程を経た志の部分のさらに内部において、地理志と礼儀志とでは都城に関する認識が全く異なっていることになる。同じ『隋書』でも礼儀志にみられるように、礼制と関わりが深い國城という言葉には、伝統的な都城の概念が色濃く継承されていたのであろう。

なお『隋書』は先述したように唐の太宗の貞観年間から高宗の顕慶年間に完成されたものであり、ここでみてきたような記載は唐代の文飾である可能性もある。もし、これらの記事が文飾であった場合、唐の高宗の顕慶年間に至っても、都城に関して古い概念と新しい概念がともに存在していたことになる。またこれが文飾でなかった場合、唐初の貞観や顕慶年間において、前王朝である隋の正史の編纂という国家的事業が行われる中で、古い都城の概念と新しい都城の概念が併存して同一文献の中に記されていても、違和感なく当時の読者に受け取られる状況であったということもいえる。つまり、隋代のみならず唐代初期においても、都城の概念の過渡的状況が存続していた可能性があるのである。このことは日本の宮都の空間構成と微妙に関係する。

## ② 唐代の都城

唐も玄宗の開元年間になると、郭までの範囲を含む新しい都城の概念が定着して

いるようである。『大唐六典』は、玄宗の命によって、開元 10 年（722）から編纂が開始され開元 26 年（738）に完成したものとされる<sup>(29)</sup>。この『大唐六典』巻 7，工部郎中員外郎の条では、宮城（宮の区域）と皇城（城の区域）のみでなく、郭の区域までの範囲を含めて都城と同義語である京城とみなしている。また『大唐六典』巻 8，城門郎の条では「明德等門爲京城門，朱雀等門爲皇城門，承天等門爲宮城門…（略）…東都諸門准此」（明德等の門は京城門と爲す，朱雀等の門は皇城門と爲す，承天等の門は宮城門となす…（略）…東都諸門此に准ず）とある。明德門は郭の区域の南面正門であるが，その門が京城門と称されていることから，都城と同義語である京城の概念が，郭の区域までを含めた範囲のこととなっていることが理解される。つまり、『大唐六典』の記載では宮と城の区域だけでなく郭の区域までを都城（京城）とみなすような認識になっている。開元年間には唐代の制度をまとめた『大唐六典』のような文献にも，郭までを含めた範囲が都城の同義語である京城として明確に記されていることになる（図 8）。

またこの時期になると，京城とともに都城の同義語でありながら，『隋書』では宮城と皇城という内城部分のみを指していた國城の概念も，『隋書』とは異なって郭の区域までを含むように変化している。そのことをうかがわせる記載が『旧唐書』にみられる。『旧唐書』は五代時代の後晋の開運 2 年（945）に完成した唐朝の正史

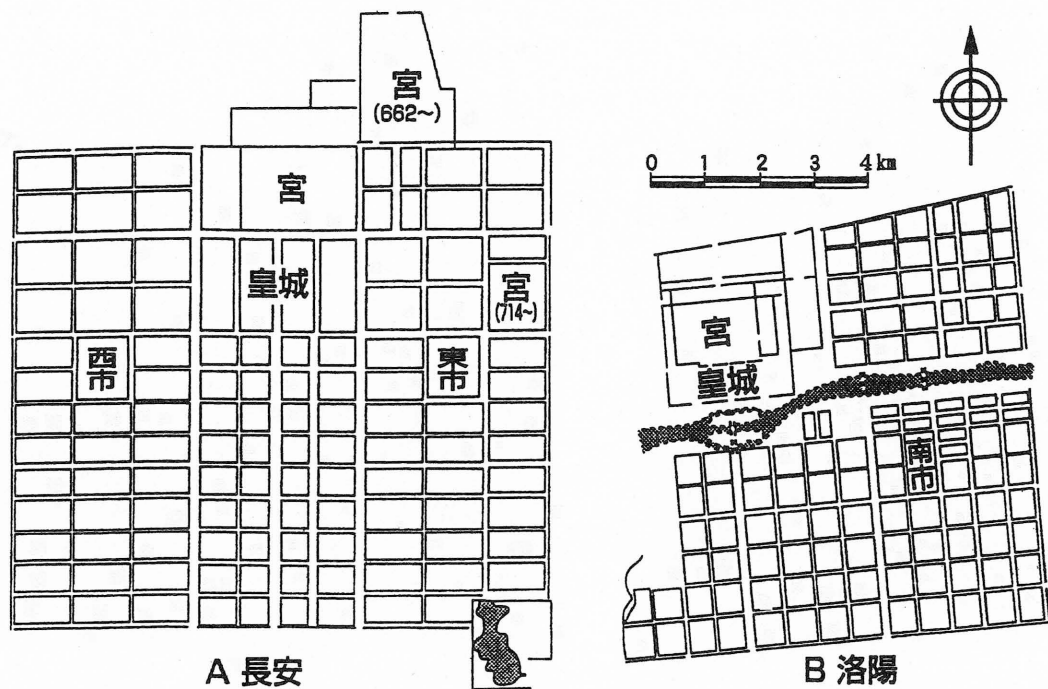


図 8 唐の長安・洛陽（妹尾達彦 2001）

であるが、実録、国史などの唐代の原史料に文飾を加えることなくそのまま収録している部分が多く、同時代史料的な価値が高いとされている文献である。

『旧唐書』巻 24、礼儀志には永泰 2 年（766）のこととして、「礼儀使于休烈請、依旧祠風伯雨師於國門旧壇、復爲中祠、從之」（礼儀使 于休烈 請うらくは、旧により風伯、雨師を國門旧壇に祠り、復して中祠となさんことをと、之に従う）とある。これは礼儀使の于休烈の申請により、風伯、雨師の國門旧壇での祭祀を復活したというものである。風伯、雨師を祀る壇は先に『隋書』の記載でみたように、通化門、金光門という大興（唐の長安）の郭門の付近にあった。『旧唐書』のこの記載にいう「旧壇」は、これらの壇を指していると思われるので、ここでいう「國門」は長安の郭門のことであると考えられる。國門とは國城の門のことであり、このことから唐代中期には、郭の範囲までを國城とする認識が定着していたことがうかがえる。先述したように隋代には、都城の同義語でありながら京城とは異なって、郭までを含めなかった國城の概念も、唐中期に至るまでには郭までを含むような変化が定着しているのである。

以上のように、唐代ではその中期までに、都城の同義語である京城の語も國城の語も、ともに郭までの範囲を含むような形で定着している。

ちなみに、『大唐六典』や『旧唐書』巻 38、地理志では、長安を「京城」、洛陽を「都城」というように、それぞれの都を「京城」「都城」という同義語を使い分けて記載している<sup>(30)</sup>。ただし、唐代の長安も洛陽も、郭までの範囲を都城（京城）と見なす点では同じである<sup>(31)</sup>。

なお、唐の長安や洛陽において、郭の区域を都城に含める認識が定着したけれども、グリッドプランの施工された郭の区域は都市域であるにも関わらず、そのさらに外部にある農村地区とともに、雍州（開元元年に京兆府に改称）管下の万年県や長安県などの州県によって管轄されていた<sup>(32)</sup>。先述したように南朝の宋の事例にみられるように、都城は都（京）において本来州県の管外の特種な区域であった。しかし、唐で都城に含まれることになった郭の区域は州県の管外とはならなかった。このようなことも、郭の区域が本来は郊の一部であるという性格との関わりがその一つの要因として考えられるのではないだろうか。この問題は中国都市の本質を考える上できわめて重要な問題であると思う。

### 3. 日本の古代宮都の構造との関わり

ここでは、中国における都城の概念の、隋代から唐初にかけての（その萌芽は南朝の梁にみられる）漸進的な変化が、古代日本の宮都の形成に与えた本質的な影響について、日本の本格的な宮都の原型的存在といえる藤原京の問題を中心に述べた

い（なお本章の詳細については、豊田裕章 2007-a を参照されたい）。

今まで述べてきたように、中国の漢代から南北朝時代までの国都では、宮とそれを内包する城の区域、つまり内城の内部の区域が本来的な意味での都城であり、外郭である郭の区域は都城には含まれなかった。しかし隋代から唐代初期にかけての過渡の様相を経て、唐代中期には郭の区域までの範囲を含めて都城とするような、新しい都城の概念が定着している。日本で本格的な宮都の造営が志向されるようになる時代は、ちょうど中国においてこのように都城の概念が大きく変化する時期に該当し、この問題が日本の宮都の構造に大きく影響を与えている可能性がある。

ところで、日本の古代宮都では、通常宮域とされている区域が内城的性格のもので、条坊の施工された区域は外郭に比定できる。日本の古代宮都の原型的存在である藤原京の全体構造は、通常宮域（藤原宮）とされている区域に対して、条坊の施工された区域の付随性がかねてより指摘されている<sup>(33)</sup>。それは内城の内部を都城とみなし郭の区域を含めない、中国の古い都城の概念による空間構成と類似しているといえる。

『続日本紀』には藤原京の通常宮域（藤原宮）とされている区域が、当時において都城と同義語の「京城」、或いはその雅称である「皇城」と呼ばれた可能性をうかがわせる記載がある。それは『続日本紀』巻3、慶雲3年（706）3月丁巳の条に「詔曰…（略）…又如聞京城内外，多有穢臭。良由所司不存檢察。自今以後，両省五府並遣官人及衛士，嚴加捉搦，随事科決」（詔して曰く…（略）…又聞くが如きは、京城の内外，多く穢臭有り。良に所司檢察を存ぜざるによる。今より以後，両省五府並びに官人及び衛士を遣わし，厳しく捉搦を加え，事に随い科決せよ）とある記載である。これは「京城内外」の穢臭に対して、兵部省や五衛府などの官人や衛士を派遣して取り締まらせるというものである。この穢臭は排便や排尿によるものである可能性が高いが何によるものであるのかはこの記事のみからは判然としない。しかし、この穢臭を取り締まるため条坊域の外部にまで兵部省や五衛府の官人を派遣するとは考えがたい。そういう点からみてここでいう京城は、通常宮域（藤原宮）とされている区域と考えられる。なお、この件に関する詔勅が『類聚三代格』にも収められているが、そこでは「京城」ではなく「皇城」や「城闕」と記されている<sup>(34)</sup>。

また『続日本紀』巻5、和銅3年（710）正月壬午朔の条には「三年春正月壬子朔。天皇御大極殿受朝。隼人蝦夷等亦在列。左將軍正五位上大伴宿祢旅人，副將軍從五位下穗積朝臣老。右將軍正五位下佐伯宿祢石湯，副將軍從五位下小野朝臣馬養等，於皇城門外朱雀路東西分頭，陳列騎兵，引隼人蝦夷等而進」（三年春正月壬子朔，天皇 大極殿に御して朝を受く，隼人蝦夷等亦列に在り，左將軍正五位上大伴宿祢旅人，副將軍從五位下穗積朝臣老，右將軍正五位下佐伯宿祢石湯，副將軍從五位下小

野朝臣馬養等、皇城門の外 朱雀路の東西に分頭し騎兵を陳列して、隼人蝦夷等を引きて進む)とある。この記事については、平城遷都にさしかかる微妙な時期であり、平城京のことか藤原京のことか明確ではない。ただしこれが平城京のことであったとしても、天平勝宝9年(757)に施行された養老令では皇城門という呼称は用いられていないので、これはより古い呼称であると考えられる。養老令ではこの門は宮城門となる点からみて<sup>(35)</sup>、さらに遡及した藤原京の段階では皇城門という呼称が用いられていた可能性は高いといえる。この記事では、通常宮域とされている区域の門である朱雀門が皇城門と呼ばれている。このことからみて藤原京や平城京の初期においては、通常宮域とされている区域が、京城やその雅称としての皇城と呼ばれていたと考えられる。

これらの記載から、藤原京の時代や平城京の初期の段階においては、内城に相当する、宮域と通常されている区域(藤原宮、平城宮)が京城或いは皇城と呼ばれていた可能性がある。京城は都城の同義語であり、皇城は本来的に都城の雅称である。唐の皇城の語も先述したようにここに由来する。

そうであれば藤原京では宮域と通常されている区域が都城であり、郭の区域に相当する条坊域は、都城(京城)には本来含まれなかったことになる。このような藤原京における京城や皇城に関する『続日本紀』にみえる記載は、内城を都城として、その外部の郭の区域を都城に含めない、中国における伝統的な都城の概念による空間構成と類似している。

近年、藤原京の条坊域も含めた全体構造が、儒教思想の中で理想的な王城の姿を記したとされる『周礼』冬官・考工記を建設理念として造営されたとする、小澤毅氏、中村太一氏の見解が有力な学説となっている<sup>(36)</sup>。しかし、先述したような検討をふまえると、むしろ『周礼』冬官・考工記の記載と対比すべきは、条坊の施行された区域を含めた京城全体ではなく、内城に相当する通常宮域とされている区域(藤原宮)であることになる(図9)。

小澤氏や中村氏の見解では、藤原京の京城全体と『周礼』冬官・考工記との対比を行い、その中にみえる王城の指標の一つともいえる「九經九緯」という字句を10条10坊のような条坊のあり方として解するものであった。しかし、『周礼』冬官・考工記を当時の有力な解釈である、後漢代の鄭玄の注や唐初の賈公彦の義疏にみえるような解釈に依拠して読むと、「九經九緯」の意味は、王城の各辺に3門ずつの門があり、それぞれの門にある三つの開口部(門道、扉口)によって、現代で言えばまるで3車線のように3本に小分けされた街路が、王城の内側に向かって延びているというものであった(図10)。これを藤原京の全体構造と対比すると、12門の配置やそれぞれの門の構造(開口部が三つであつたらしいこと)などからみて、むし



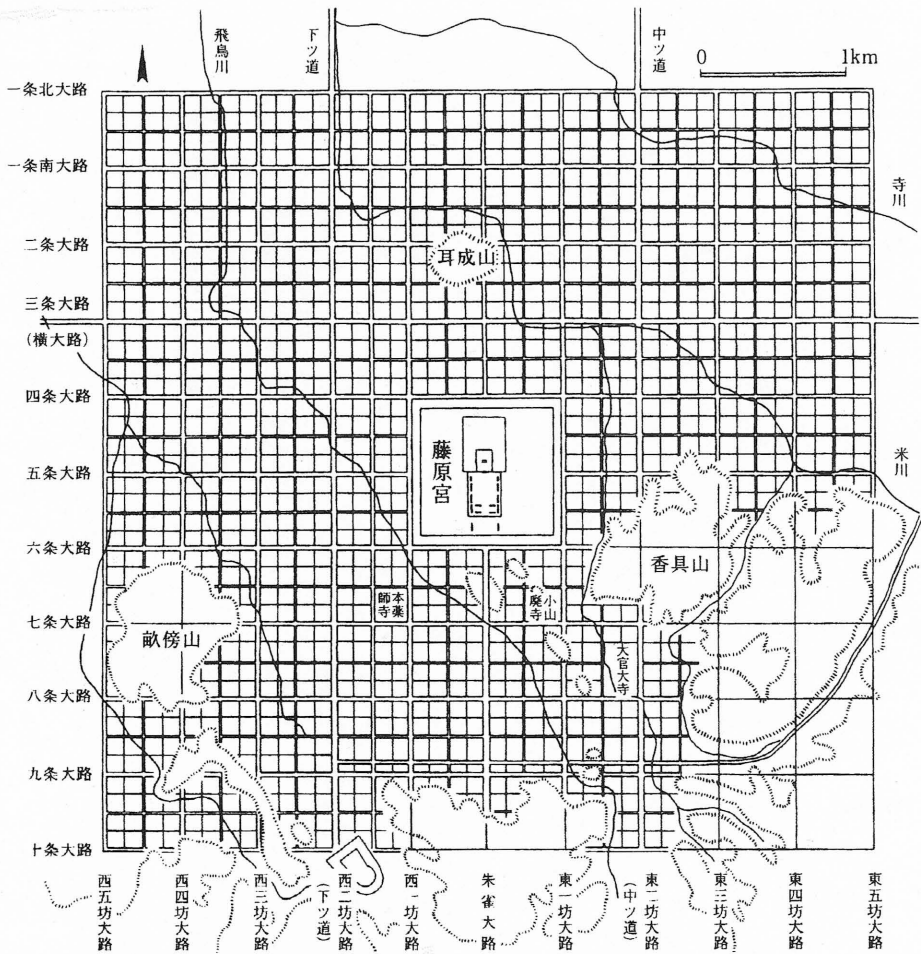


図 9 藤原京の復元 (小澤毅 1997)

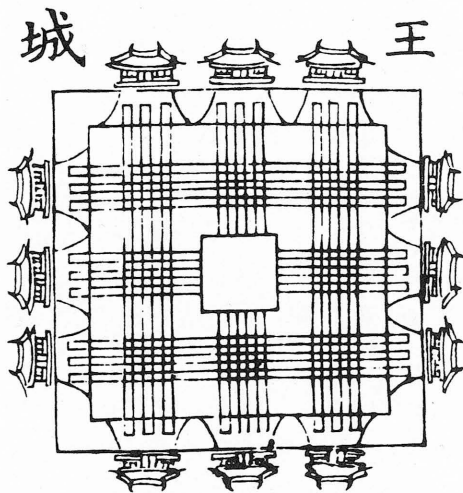


図 10 最崇義『三礼図』  
所載の王城図  
(『新訂三礼図』1984 より)

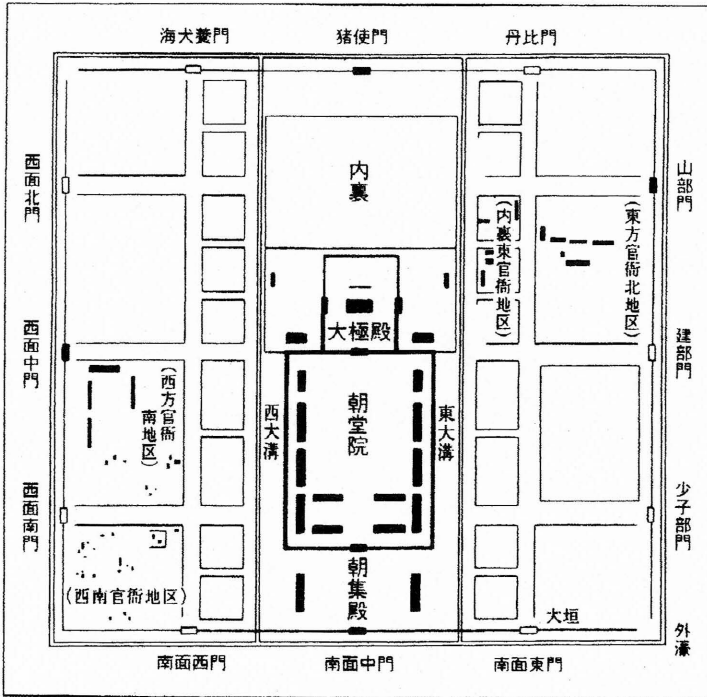


図 11 藤原宮復元図  
(寺崎保弘 2002)

ろこの配置は通常宮城（藤原宮）とされている区域と対応することになる。

このことから、藤原京では通常宮城（藤原宮）とされている区域の内部こそが、造営当時、『周礼』冬官・考工記にみえるような王城である國（國城）に該当する区域として、全体の空間構成が設計された可能性が考えられるのである。王城（國城）とは都城の同義語であり、このことは、先述した『続日本紀』や『類聚三代客』にみられる京城や皇城の記載とも合致し、藤原京では内城に相当する、通常宮城（藤原宮）とされている区域を都城（京城，皇城）とする空間構成が行われていたといえる（図 11）。

『周礼』にみえる王城としての國は、『周礼』の冒頭の天官冢宰第一の「惟王建國（これ 王，國を建つるに）」に関する鄭玄の注の「營邑于土中。七年，致政成王，以此礼授之，使居雒邑，治天下」（邑を土中に営む。七年，政を成王に致す。此の礼をもってこれに授け，雒邑に居りて，天下を治めしむ）などによると，西周の東都である雒邑（後の洛陽）の状況を示したものであることになる<sup>(37)</sup>。また鄭玄はここで雒邑（後の洛陽）を天下の中心を表す「土中」とであるとする。この「土中」という場所の持つ礼制上の重要性は、『周礼』のみならず『尚書』などの他の儒教の経書やその注ならびに義疏にも多々記されている<sup>(38)</sup>。

西周の制度は周制といわれ理想的な制度とされてきた。また西周の東都雒邑の構

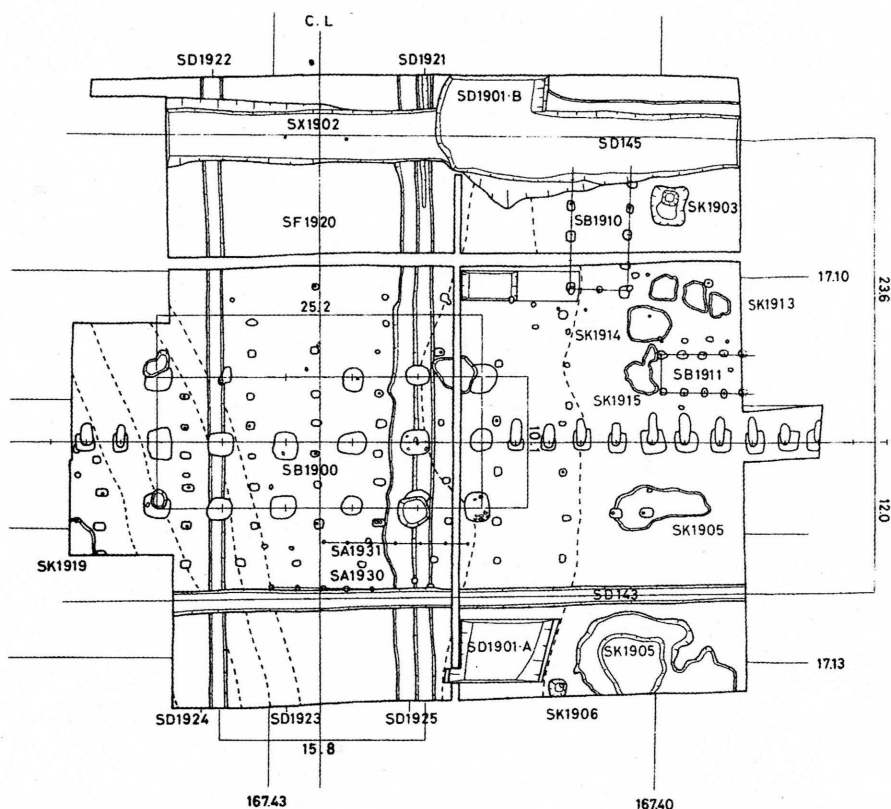


図 12 藤原京北面中央の門の遺構（奈良文化財研究所 1976）

造は儒教で聖人とされる周公が定めた理想的で神聖な都城の構造として尊重されていた（図 12）。

ところで、この西周代の雒邑の空間構成に関する記載が『逸周書』（『汲冢周書』）作雒解<sup>(39)</sup>に「周公作大邑成周于土中。立城，方千六百二十丈。郭方七十二里，南繫于洛水，北因于陝山」（周公 大邑成周を土中に作る。城を立つるに，方千六百二十丈なり，郭は方七十二里なり。南は洛水に繋なり，北は陝山に因る。）<sup>(40)</sup>というように見える。それによると雒邑には「方千六百二十丈」（森鹿三氏によると方九里に相当するという）の王城<sup>(41)</sup>があり，その城外の方 72 里は「郭」（郭の同義語）と呼ばれる区域であった。この記載では郭（郭）は王城の城外の区域であり，それは王城に含まれないことが端的に記されている。この『逸周書』作雒解にみえる記載が，西周代の雒邑（後の洛陽）の実態を正確に伝えたものかはともかくとして，中国においても長い時代にわたって理想都市であり神聖都市であったともいえる西周の雒邑の構造はこの記載のようなものと考えられていたのではないだろうか<sup>(42)</sup>。古代の日本においてはなおさらそのように考えられたことであろう。

藤原京の宮域を『周礼』冬官・考工記にみえる王城（國）に相当する区域とみなせば、宮域の周囲に広がる条坊域は、周制でいえば『逸周書』作雒解にみえるような、王城の城外の広大な郭（郭）に相当する区域に比定できる。この区域は王城の城外であり、儒教の礼制における入れ子状の同心方の世界観でいえば、「近郊」と呼ばれる区域の一部に相当する。そのようにみると条坊域は近郊でありながら、しかも郭（郭）と呼ばれるような都市域であることとなる。このことは、この区域が王城と周囲の農村区域との連続的で中間領域的なものであったことを示していると考えられる。これは先述した中国の南北朝時代の都城における、郊郭的な性格を有する郭の区域の性格とも重なる。

以上のように藤原京は、中国の隋代以前の伝統的な都城の概念をふまえて、宮域と通常されている区域の内部を都城とし、そこに『周礼』冬官・考工記にみえる王城である國（國城）を志向して、その外部の条坊の施された区域を王城の城外に広がる郭（郭）として、全体の大まかな空間構成の設計がなされたと考えられる。

なお、平城京の段階になると、その全体構造にはかなり唐の長安を意識した要素がみられるようになる<sup>(43)</sup>。また唐の洛陽からの影響が考えられる点もある<sup>(44)</sup>。養老令では郭の区域に相当する条坊の施工された区域までを京城としているが、これは唐で定着した新しい都城の概念に則った規定であると思う。しかし、都城の重要な指標といえる 12 門は、藤原京同様、通常宮域とされている区域に設けられていたようである。これは平城京のある時期から郭の区域までを含める唐で定着した新しい都城の概念が、藤原京以来の空間構成の上に重層的に導入されたためではないだろうか。その象徴が平城京で羅城門が建造されたことであると思う<sup>(45)</sup>。しかし、平城京のみならず長岡京、平安京にも、王城の指標である 12 門は、内城である通常宮域とされている区域に原則的に踏襲されていったようである<sup>(46)</sup>。このことは、藤原京で確立した構造が重要な伝統的規範となって、それ以後の時代においても、根強く遺制的に継承されたためであると考えられる。

## 結論

都城という言葉は本来史料用語であるが、学術用語として日本のみならず中国においても定着しているといえる。そして、この言葉は京城全体を表す言葉という前提に立って用いられているように思われる。しかし、都城の概念は隋唐時代に大きく変化しており、このことは中国や日本の都市の本質に関わる重要な問題と関わっている。

中国の漢代から南北朝時代の都は、宮の区域とそのまわりの城の区域、さらにそのまわりの郭の区域から構成される三重の構造であったといえる。これを別の言い

方をすれば内城（宮の区域と城の区域）と外郭からなる空間構成と表現することもできる。

前漢の国都長安は、未央宮などの諸宮（宮の区域）を内包する、堅固な城壁で囲まれ 12 門の配された城の区域、さらにその外部の郭の区域から構成されていた。城の区域の内部、つまり長安城には諸宮とともに官署や特定の人々の住宅地が存在し、内城に相当するこの内部が都城（京城）であったようである。その城外の郭の区域は、住宅地であるとともに墳墓も存在する近郊的な様相を呈する区域であった。郭の区域の外縁には郭門があったことが推定されているが、郭壁が存在したかどうかは明らかでない。

後漢から西晋の国都洛陽も、北宮などの宮（宮の区域）を内包する、12 門を配し城壁で囲まれた城の区域の内部（洛陽城）が都城（京城）であった。この外部には郭の区域が存在したけれども、その外周をめぐる郭壁の存在の有無はわからない。

北魏の国都洛陽も、宮城（宮の区域）を内包する城の区域の内部が、『魏書』酈老志の記載に明確にみえるように都城であった。そして郭の区域は都城に含まれなかった。都城の内部には宮城とともに永寧寺のような寺院、そして官署や住宅地が存在した。また、郭の区域の内部にも住宅や寺院が建ち並んでいた。都城の周囲は重厚な城壁で囲まれていたけれども、郭の区域の外縁の郭壁はそれに比して防御機能の点などで劣弱なものであった。なお、北魏洛陽の郭の区域は、京には含まれるけれども都城の城外の都市域であり、この郭の区域は周辺の農村地帯と連続的ともいえる都市域であった。

南朝の建康では、宮城（宮の区域）を内包するように「六門之内」或いは「六門都牆」と呼ばれる城の区域が存在した。この内部が都城であり、そこには宮城とともに官署や住宅地が存在した。建康では宮城（台城）の城壁は雉堞（胸壁）も備えた防御性の高い城壁であったけれども、都城の城壁は初期においては竹籬であり、後には築地状のものに改修されたことが推定されている。この都城の外部には広大な集住域があり、それは郭と呼ばれていたようである。この郭の区域には数多くの住宅地や寺院などが存在した。この都城の城外の郭の区域を、近郊区である「郊」、或いは郊に形成された都市域の意味である「郊郭」とする認識も存在した。なお、郭の区域の周囲は、土塁か竹籬状の簡素な郭壁で囲まれ、そこには 54 箇所にもものぼる籬門と呼ばれる門が設けられていたようである<sup>(47)</sup>。

南朝の梁の武帝の時に、皇帝権の強化を目指した天監の改革の中で、郭の区域の範囲までを都城に含める新しい都城の概念が提起され、それに応じるように都城の門を表す「國門」が、郭の外周ラインに 1 門だけではあるけれども建造された。この國門の建設は 1 門ながら、郭の区域までの範囲を都城に含める新しい都城の概念

の受容を視覚的に示したものであり、隋唐時代に大きく変化する新しい都城の概念の先駆的試みといえる。

隋代には国都である大興（唐では長安と改称される）の構造に大きな変革がなされた。宮と城の区域は連結したような構造となり、それぞれ宮城、皇城と呼ばれるようになる。また城の区域の内部には、住宅地や寺院が置かれなくなり、そこは純粹な官署街となった。そして、グリッドプランの施された郭の区域のみが住宅地となった。隋唐代の大興（唐の長安）の外郭壁の構造自体は北魏洛陽の外郭壁に比べてとりたてて堅固になったという形跡はあまりみられない。しかし、『周礼』冬官・考工記にみえるような王都の重要な指標である「旁三門」（王城の各面に3門ずつを設ける）を郭の区域に意識して配置しているように、郭の区域の東・西・南の各面に3門ずつの門が設けられている。このことから、隋の大興では郭の区域までを王都である都城とみなすような構造で全体の基本設計がなされていることがうかがえる。また郭の区域がそれまでの都のように不整形ではなく、直線的な整形となっていることも特筆に値する点といえよう。このような隋の大興における国都の構造上の変革は、皇帝権の強化を目指した制度改革の流れに応じた構造であり、梁の武帝が目指したような方向性を、より強力に大規模な形で推し進めたものといえる。この隋代の大興における構造面での大きな変革に対応するように、都城と同義語である京城の概念は、郭までを含めるように変化したようである。しかし、同じく都城の同義語でありながら礼制と関わりの深い國城の概念は、南北朝時代の伝統的な概念を踏襲して郭の区域を含まなかった。このように隋代には、構造面での大きな変革にともなって、都城の古い概念と新しい概念が同時に併存するという、一種の混乱状態ともいえる過渡的状況がみられる。このような状況は唐初まで継続していた可能性も高い。しかし、唐代の中期までには、長安では都城の概念が、京城も國城も郭の区域までを含むような形で定着している。

儒教にみられるような入れ子状の同心方の世界観では、王城（都城）の城外には近郊、そしてさらにその外部には遠郊というような区域が広がっている。郭の区域は、漢代から南北朝時代の観念では、京城には含まれるけれども、都城の城外の近郊区に形成された集住域であるという、周辺の農村地域とのいわば中間領域的な場所であったといえる。そのため郭の区域は近郊区を表す「郊」、或いは近郊区に形成された都市域を表す「郊郭」と記載される場合があった。

隋唐時代における都城の概念の大きな変化の後も、郭の区域が万年県、長安県などによって周囲の農村地区とともに一体的に管理されているのは、この区域を郊であるとする伝統的な観念がいまだに色濃く残っていたことも、一つの大きな要因として考えられるであろう。戸口統計が、それ以後の時代においても元代の録事司の



場合をのぞいて、都市域だけの統計がなされることはなく、周辺の農村地区とあわせて把握されていたことは、この問題との関連性が考えられる<sup>(48)</sup>。

漢代から南北朝時代の郭の区域を含まない都城（宮と城の区域）が、南朝宋代の建康の事例にみられるように州県の管外であったことは、本来都城が民政の対象外の特異な区域であったためではないだろうか。それは都城がもともと皇帝やその王権を支える中央官署、王権に直接的に関わる限られた人々の住宅を守ることを主眼とする城塞であったこと示している。都城の概念は隋唐時代に一般の住宅地区である郭の区域までを含めることになったが、隋唐時代の郭の区域は今まで同様に州県の管轄する区域であった。概念の上では都城に含まれることになった隋唐時代の郭の区域ではあるけれども、本来都城の城外の郊に形成された集住域であるという伝統的な性格とともに、住宅地区がこの区域に一元化されたため、ここを州県の管轄からはずすということが、現実的に困難であったこともその要因として考えられる。

ところで、中国で都城の概念が大きく変化する過渡的な時期に、日本では本格的な都城の造営が模索されるようになる。日本の古代宮都の原型的存在である藤原京の空間構成は、隋代以前の内城の内部を都城（王城、京城）とする伝統的な空間構成に依拠しつつ、その内城の内部の構造に周制の王城の伝統を志向して全体のおおまかな空間構成がなされたと考えることができる<sup>(49)</sup>。『周礼』冬官・考工記にみえる王城の重要な指標である 12 門が、通常宮域とされている区域（藤原宮）に設けられるのはそのためであると考えられる。この時期は中国においても都城の概念をめぐって過渡的な状況にあり、日本にも混乱した情報が伝えられていた可能性も存在する<sup>(50)</sup>。

平城京のある段階から、唐で定着した郭までを含める新しい都城の概念が導入され、京城全体が都城（王城、京城）となる。その象徴が羅城門の建設であると考えられる<sup>(51)</sup>。しかし、平城京のみならず長岡京、平安京にも、『周礼』冬官・考工記にみえるような王城の指標である 12 門は、内城である宮域に原則的に踏襲されていく。このことは、藤原京で確立した古い都城の概念による構造が重要な伝統的規範となって、それ以後の時代においても、本来の意味は薄れつつも根強く遺制として継承されたためではないだろうか<sup>(52)</sup>。

以上のような問題は、日本や中国などの島嶼部も含めたユーラシア東部地域における都市の本質を考え、それを世界における都市、とりわけ城壁都市の中で比較し位置づける上で重要な観点であると考えられる。今後は郭と郊の問題や、都城を考える上においても重要な意味を有する明堂・辟雍・靈台などの礼制建築の問題<sup>(53)</sup>、北宋以後の都城の問題<sup>(54)</sup>、都における皇帝の逃避経路としての庭園の機能<sup>(55)</sup>などについて考察を深め別稿を用意したい。

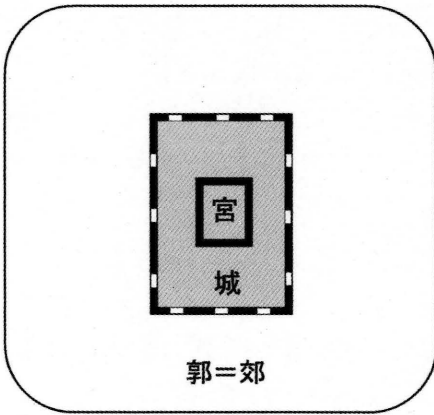


[参考図：豊田作成]

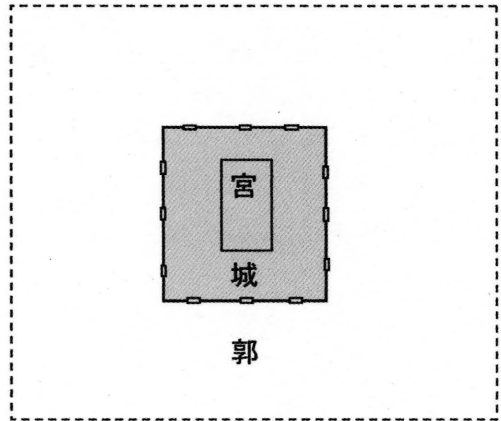
## 宮・城・郭からみた都城の概念の変化

■ は都城（京城）

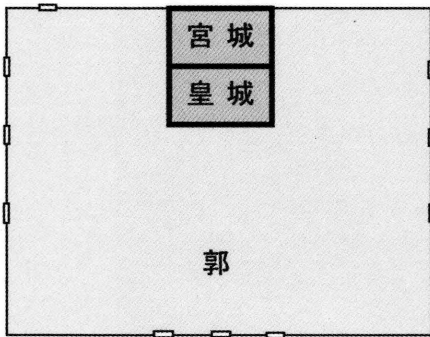
### 漢代～南北朝時代



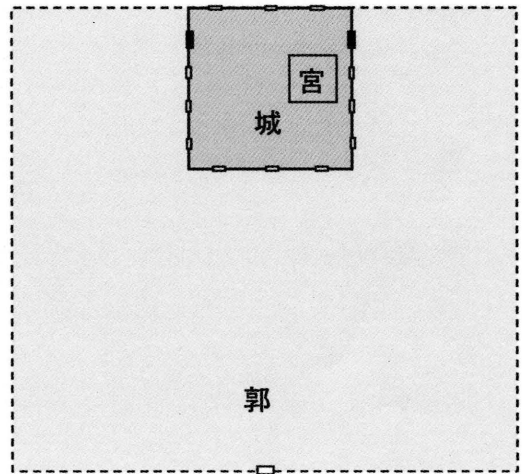
### 藤原京



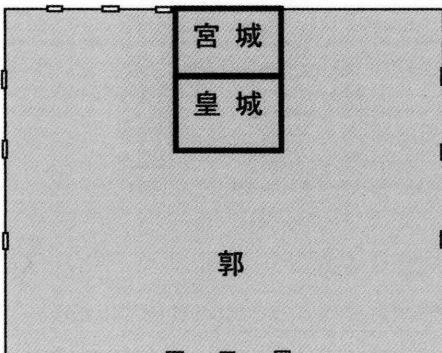
### 隋代



### 平安京



### 唐代



## 附論 石清水八幡宮文書中にみえる周室王城明堂宗廟圖

ここでは附論として、現存世界最古級の可能性のある中国の王城図、明堂図についてふれたい（なお、本章の詳細については豊田裕章 2007-b を参照されたい）。

石清水八幡宮文書所収の田中家文書（1961 年に重要文化財に指定）の中に「異朝明堂指圖記」という外題の付けられた史料がある。この史料は「少納言入道信西藤原通憲王宮正堂正寝勘文案」という題で『大日本古文書 家わけ四ノ四 石清水文書之四』（東京帝国大学文科大学史料編纂掛，1912 年）に翻刻されている。また『続石清水八幡宮史料叢書 石清水八幡宮文書目録 1』（続群書類従完成会，1985 年）には文書の写真が収められている。この史料について『大日本古文書』では、信西の自筆ではないが当時からあまり隔たっていない時代に写されたものであろうとしている。

皇學館大学史料編纂所の遠藤慶太氏は、この史料について、信西の自筆ではないものの鎌倉初期の写本であり、しかも偽作などの不自然さがなく、しかも石清水田中家文書という信頼性の高い一括史料として伝わっていることから、史料の信憑性が高いことを指摘している<sup>(56)</sup>。

遠藤氏は、この史料中にみえる『日本後記』の逸文について、それが嵯峨朝における宮殿の殿舎名称の唐風の名称への改称に関する貴重な史料であることや、その逸文によって日本における紫宸殿、仁寿殿という殿舎名称の確実な初出を押さえることができることを述べている<sup>(57)</sup>。

ところで、この「異朝明堂指圖記」の中には、四つの礼制に関する図がみえる。しかし、「異朝明堂指圖記」中にみえるこれらの図に関して、従来の研究でその出典に関して考察を行った研究はないように思われる。

4 図の中で「三礼圖所載六寝圖」（図 13）と「三礼圖所載之明堂圖」（図 14）は、北宋初期の聶崇義の撰になる『三礼圖』から引用されたと考えられる（図 15・16）。これに対し「周室王城宗廟明堂宮室圖所載圖」（図 17）、「周室王城明堂宗廟圖所載之明堂圖」（図 18）は、その名称から考えて、『隋書』巻 32、経籍志にみえ唐代の『歷代名畫記』巻 3 に「古之秘畫珍圖」（古の秘畫珍圖）、つまり上古の秘画珍図とされた、後漢代の阮瞻の撰になる『周室王城明堂宗廟図』の逸図である可能性が考えられる。

この後者の 2 図の内の図 17 をみると、本来宗廟（太廟）のあるべき位置に辟雍（太学）が描かれていることから、辟雍と宗廟を同一のものとする解釈がみられる。また図 18 の中には、明堂の部分名称として太廟がみえる。これは明堂と太廟を同一

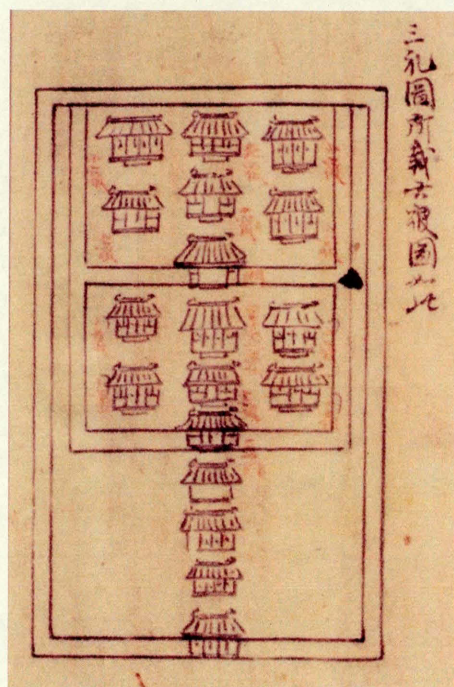


図 13 三礼圖所載六寢圖

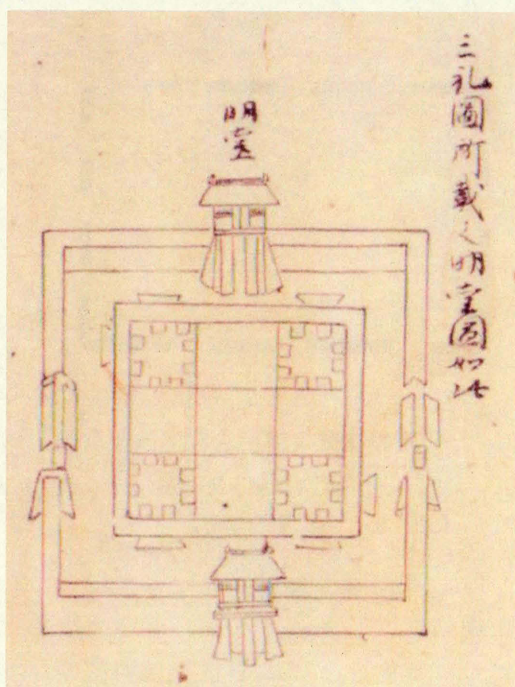


図 14 三礼圖所載之明堂圖

(いずれも、石清水八幡宮所蔵『異朝明堂指圖記』より)

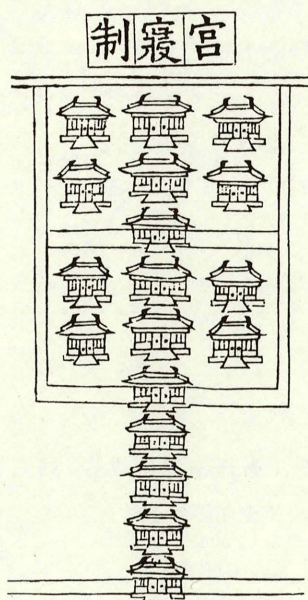


図 15 聶崇義『三礼図』の宮寢図

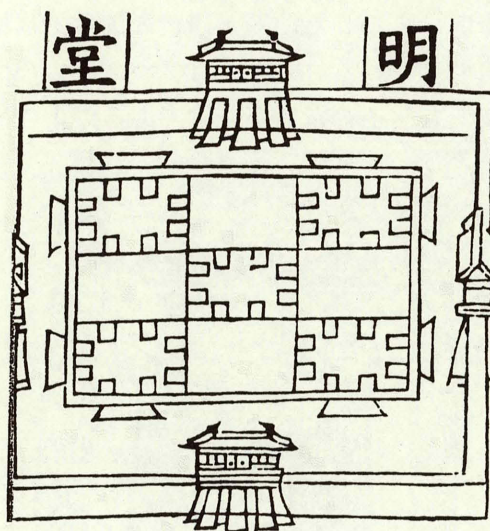


図 16 聶崇義『三礼図』の明堂図

(いずれも、『新定三礼図』1984 より)



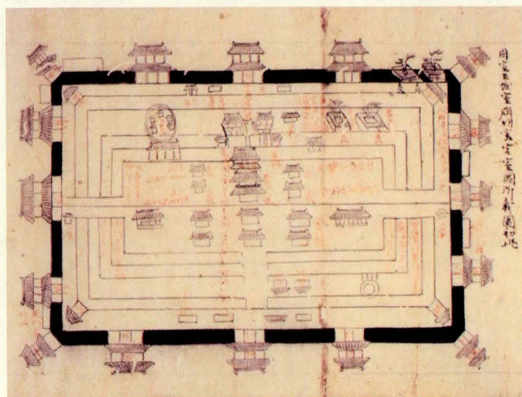


図 17 「周室王城宗廟明堂宮室圖所載圖」

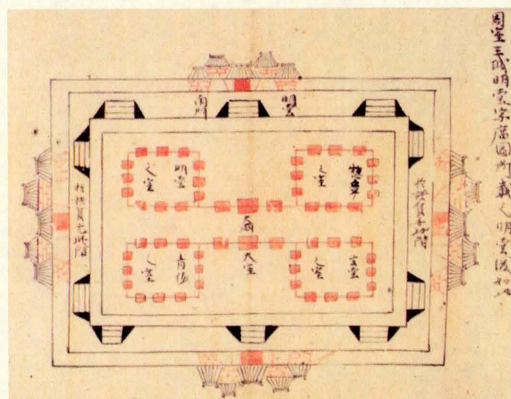


図 18 「周室王城明堂宗廟圖所載之明堂圖」

(いずれも、石清水八幡宮所蔵「異朝明堂指圖記」より)

のものとする見解を示しているといえる。

後漢代には、太廟、明堂、辟雍、靈台という王権にとってのきわめて重要な礼制建築は、実態としてはそれぞれ別個の建物として設けられていたようである。しかし、当時、これらを本来は同一の建築物の部分名称とする、蔡邕や廬植などの經学上の解釈が存在した<sup>(58)</sup>。このことから、図 17, 18 が後漢末期頃の廬植や蔡邕のような太廟と辟雍と明堂を同一のものとする解釈に依拠した図であると考えることができる。また阮諶は廬植と人脈的なつながりがあったようである。これらの点は、この 2 図に描かれた門闕が漢代の画像石に描かれた門闕の図(図 19)や石彫ときわめて類似していることとともに、これらの図の原図になるものの作成年代が後漢末期頃であり、その撰者が阮諶であることの証左となるように思われる。

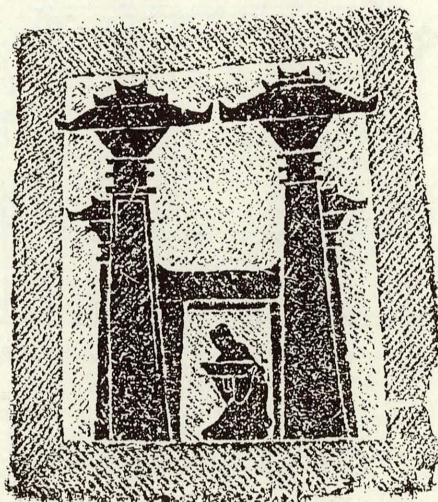


図 19 四川省博物館所蔵「雙闕迎謁」

(中国美術全輯編輯委員会 1988)

以上の点から、これらの2図は後世の偽作とみるよりも、後漢代の阮愼の撰になる『周室王城明堂宗廟図』の貴重な逸図である可能性が高い。このように、その内容からみても後漢末期の阮愼の撰になる可能性が高い貴重な図面が、信西という平安時代末期の、政治家で有能な官僚でありながら、しかも希代の碩学であった人物によって朝廷への上申書に引用され、しかもそれが重要文化財の石清水八幡宮の田中家文書の中に鎌倉時代の写本として収められていたのである。これらのことは、この史料の有する信頼性や重要性がきわめて高いことを示している。

中国で、王城や明堂などのような礼制に関わる事項について、図像を添えて示した文献で、現存する中で最も古いとされていたものが、南宋の淳熙2年(1175)に写された『三礼図』であった。これは先述したように北宋初期に聶崇義が撰した文献の写本である。これに対し、信西の勘文に引用された図17, 18は鎌倉時代の写本とはいうものの、後漢末期の阮愼の撰になる礼制に関わる図の写本であると考えられる。これは中国の王城図、明堂図としては、現時点において世界で現存最古級のものである可能性があるといっても過言ではないように思える。

なお、今後はこれらの2図が阮愼の原図をどの程度正確に伝えているかについてさらに検討していきたい。そして、この史料の有する意味や重要性についても、さらに考察を深め別稿を用意したいと考えている<sup>(59)</sup>。

## 注

- (1)都城とはもともと諸侯の城を表す言葉であった(礪波護 1987)。これに対し、天子である周王の城は王城である。しかし漢代から南北朝時代、とりわけ南北朝時代以後、都城という言葉は天子の城としての王城、京師の城(京城)の意味で用いられるようになる。ただし、本稿で考察している都城の概念の変化はこの問題ではなく、天子の城を意味するようになった都城の語が、隋唐時代に内城のみでなく外郭をも含めるようになる変化についてである。
- (2)本稿では原則的に常用漢字を用いたが、王城の意味での「國」は本稿の主題に関わる文字であり、その文字字体の形成過程にも重要な問題がこめられているため、あえて旧字体を用いた。また附論の章では、史料中にみえる文字の異同等の情報も伝えるために史料中に用いられている文字の字体を用いるようにした。
- (3)劉慶柱、李毓芳 2003。
- (4)五井 1987。楊寛 1987。
- (5)五井 1987。
- (6)楊寛 1987。
- (7)この史料は前漢代の長安の都で、「郭」の区域に墳墓が営まれていたことをうかがわせる

都の空間構成と墳墓の立地との関係を考える上で重要な史料であると思う。なお、筆者は前漢の長安の都城である長安城の城外に郭の区域が拡充されることの大きな要因の一つとして、陵廟の廃止や陵邑の解体との関わりを考える。宮・城・郭という三重の空間構成は、陵邑が廃止される時期にその居住者が長安城周辺に移住したことによって確立したのではないだろうか。この漢代に確立した宮・城・郭という空間構成が、基本的に明、清の北京におよぶまで継承されたと思う。これらの問題については別稿で詳論したい。

(8)中国社会科学院考古研究所 1973, 1998。

(9)宮川尚 1956。

(10)楊寛 1987。

(11)中国社会科学院考古研究所 1978 では、霊台の遺構と考えられるものの東に明堂の遺構と考えられるものが存在することが指摘されている。

(12)中国社会科学院考古研究所 1973。

(13)杜玉生 1993。

(14)『洛陽伽藍記』巻五に、「京師東西二十里。南北十五里」とある。これは郭の区域までを含めた範囲に相当する。このように郭を含めた範囲が京師として記されているので、当時において京師（京、都）の概念には郭が含まれていたことがわかる。

(15)日本の平安京では遷都当初、寺院の造営が規制されたが、北魏の洛陽における寺院建設を制限するような仏教政策が、『魏書』のような史書などを介して影響を与えている可能性も考えてみる必要があるのではないだろうか。

(16)『南齊書』巻23、王儉伝に「宋世、外六門設竹籬」（宋世 外の六門に竹籬を設く）とあり、南朝の宋の時代には6門の開かれた都城は、都城とは名ばかりの竹籬で囲まれていたことがうかがえる。『南齊書』巻2、高帝紀、建元2年（480）5月の条に「五月、立六門都牆」（五月、六門都牆を立つ）とあり、また先述した王儉伝によると、同じく建元2年のこととして高帝が王儉の提案を受けて「改立都牆」（改めて都牆を立つ）と記す。このことから南齊時代に、それまでの竹籬を改めて牆壁に造り替えたことがうかがわれる。なお建康の都城について「都城」と言わずにあえて「都牆」と記される場合が多々みられることは、その周囲の囲壁が「城」とは言いながらも実態が「牆」と呼ばれるべきものであることを強調している可能性がある。この建康の「牆」について考える上で参考になる記事が、北魏洛陽のことではあるが『洛陽伽藍記』巻1にみえる。そこでは北魏の国都洛陽にある永寧寺の囲壁を「牆」と表現し、それについて「寺院牆皆施短椽，以瓦覆之，若今宮牆也」（寺院の牆は皆短椽を施し，瓦を以て之を覆う，今の宮牆の若きなり）と記す。この記載では、永寧寺の「牆」は屋根を載せた築地状のもので、北魏の「宮牆」も同様のものではあったとしている。北魏洛陽の宮域にも築地状の「宮牆」で囲まれた部分が存在したことがうかがえる。このことから「牆」という言葉には、特に築地状の囲壁のことを指



す場合があることが推定できる。南朝の都である建康において6門の設けられた区域の囲壁は、戦闘などの際に目立った防御機能を有していたような記録はみえない。そのような点からみて建康の6門の配された区域を囲む「牆」も築地状の「牆」であったのではないだろうか。そのため、建康では、あえて「都城」であるにも関わらず、「都牆」と表現されていた可能性が考えられる。なお、このような「牆」に設けられた屋根は、偉容を整えるとともに、城壁などに比べて上部の幅が狭い「牆」の雨水などによる損壊を防ぐためのものであると考える。なお、筆者は唐の長安や洛陽の外郭壁は、後述するように幅約4m程度の部分がかなり多かったのではないかと考えている。それらの中には場所によっては屋根を載せた牆もあったのではないだろうか。今後、この外郭壁や、同様に幅の狭い牆壁である坊牆の遺構で瓦の出土する可能性を推定する。

(17)中村圭爾 1988, 1984。

(18)秋山日出雄 1984。

(19)『建康実録』巻20、禎明2年の条に、「又於郭内大皇寺造七層塔、未畢功、而火從中起、飛向石頭城、燒人家無數」（又郭内の大皇寺において七層塔を造る、未だ功畢らざるに、火中より起こり、飛びて石頭城に向い、人家無数を焼く）とあり、郭内の大皇寺から出た火が、周辺の多くの家に延焼したことが記されている。この記事からは、南朝建康の都城の城外に数多くの人家が建ち並ぶ集住域が形成され、そこが「郭」と呼ばれていたことがわかる。

(20)中村圭爾 1984。

(21)秋山日出男 1984。

(22)梁代の武帝の天監年間、建康の郭の区域の門として新たに造営された國門は1門のみであったようである。建康の郭の区域の門と考えられる籬門は、土塁状のものと推定されている郭壁同様、おそらく簡素な構造のものであったであろう。これに対し國門はそれなりの偉容を備えた建造物として新たに造営されたと考えられる（城壁の上に門觀を置くような構造ではなく、おそらく日本の木造重層の門のような建築様式であったのではないだろうか）。國門造営に際して、他の籬門は同じライン上にあるものの、特別な改修や改称はなされていない。この南朝梁の國門造営にみられるように、1門の建造でもって郭までを含める新しい都城の概念の受容を象徴的に表現するあり方は、後述するような日本の平城京や平安京における羅城門のあり方と類似していると思う。

(23)小林聡 2005。小林氏は、梁代に官制・礼制の大改革が行われた天監7年（508）に宮城の正門である端門、大司馬門の左右に神龍闕、仁虎闕が建造され、それ以後普通3年（522）まで太極殿の新築など礼制に関わる建築事業が行われたことを指摘する。このことによって、梁王朝は支配する天下のあり方を周知し、『五礼儀注』の施行とあいまって、ハード・ソフト両面で礼制国家の偉容を整えるに至ったという。國門の建造もこのような流れの中



の一環として理解できるのではないだろうか。

- (24)このように國都の構造が大きく変化させられた要因として、谷川道雄 1971 で述べられているような「城民」の地位の低下との関係も考えられるのではないだろうか。また兵戸制から府兵制への変化や、辟召制から科举制へという官吏採用における一元化という、一連の皇帝権の強化のための制度改革に応じるように、國都の設計プランがなされたためと考えられる。
- (25)妹尾達彦氏も隋唐長安城の都市プランに『周礼』の王都モデルが色濃く反映していることを指摘している（妹尾達彦 2001）。
- (26)日本で飛鳥時代などに有力豪族の私邸でしばしば政務が行われていることや、律令制の導入が試みられるようになるとされる天智朝においても、官署的な機能を有する場所が散在していたことが推定されることは、南北朝時代以前の中国における辟招制などに応じた、比較的独立性の高い官署のあり方からの影響が考えられる。
- (27)國城は、王城の同義語である。國という言葉は国家を表す場合もあるように多義的なもので、史料の中には王城の意味での國を特に國城と記す場合がある。『周礼』冬官・考工記の匠人の条にいう國は、この王城としての國城のことである。國城という言葉は經学や礼制の上で用いられることが多い。
- (28)『隋書』卷 29 にいう「里一百六」とは唐代で坊と呼ばれるものである。唐代の長安では坊と呼ばれる区画が隋代の大興では里と呼ばれている。北魏の洛陽に関して『魏書』卷 8、宣武帝紀では「發畿内夫五万人築京師三百二十三坊」（畿内の夫五万人を發して京師三百二十三坊を築く）と記され、京城が 323 坊に区画されていたことが記されている。しかし、『洛陽伽藍記』にみえる城内ならびに郭内の地名は里で示されている。このことは、従来あまり問題にされていなかったのではないだろうか。今後深めていきたい。また『隋書』卷 29、地理志にみえるような隋の大興城の規模に関する数値的な様々な記載は、唐に至ってもあまり変わらない数字であり、唐の時代になれば前朝の情報として遣唐使や遣唐留学生も比較的入手しやすかったと考えられる。井上和人 2005 では細かな数値的な問題から平城京と唐の長安の対比が試みられている。日本にこのような数値情報は文献を通じて伝来していた可能性が高く、興味深い見解であると考えている。
- (29)内藤乾吉 1963。内藤氏は開元 23、24 年頃に『大唐六典』の大半が完成していたとしている。
- (30)『大唐六典』卷 7 では長安を京城、洛陽を都城と記している。また『旧唐書』卷 38、地理志では長安を京師の京城、洛陽を東都の都城と表現している。このように長安と洛陽で呼称が使い分けられていた点は従来注意されていなかったと思う。
- (31)なお『旧唐書』卷 38、地理志では、長安の「宮城」にあたる範囲が、「皇城」という呼称で表現されている。このことから、唐代において、皇城の語が、宮城と皇城とをあわせ

た内城的な区域の総称としての意味を有する場合があったことがうかがえる。これは、皇城の語が、南北朝時代以前、宮を内包する内城的な都城の雅称であったことや、宮城と皇城を併せた区域を本来の都城を踏襲する区域であるとする当時の認識に起因すると考える。唐で官署街の区域（通常、皇城と呼ばれている区域）のみを皇城と呼び、それに接する宮城と区別するのは、隋唐時代の大興（長安）で、両者がそれまでの構造と異なった連結したような構造となり、次第に城の区域を継承する通常皇城と呼ばれている区域のみが、皇城と呼ばれるようになったためであろう。ただし、皇城の語が本来都城の雅称であるということから、隋唐時代になっても、宮城と皇城を併せたものを、本来的な意味から皇城と呼ぶ場合もあったと考えられる。『大唐六典』巻8には、「後周（北周、筆写注）…（略）…城門中士一人、下士一人掌皇城十二門之禁」（後周（北周、筆写注）…（略）…城門中士一人、下士一人、皇城十二門の禁を<sup>つかさど</sup>る）という記載がみえる。これは北周の官制では、城門中士が皇城12門を掌握していたとする記載である。この記載から12門を配した内城に相当する北周の長安城（漢代以来の長安城で唐の長安とは別位置）が、「皇城」と称されていたことがうかがえる。後に、北宋の開封や元の大都で宮城に該当する区域が皇城と呼ばれることは、本来都城の雅称であった皇城の語が形骸化したこととともに、唐代にみられたような宮城をも含めた区域を皇城と表現する場合があったこととの関わりも考えられる。これに対し『旧唐書』巻38、地理志にみえる唐の洛陽についての記載では、宮城の語が、宮城と皇城や東城などをあわせた内城的な部分の総称として用いられている。これは、唐の洛陽では機能の上でも面積の上でも、宮城が内城的な区域の中で他を凌駕する存在だったためであると考ええる。

(32)愛宕元 1981。

(33)山中章 1993、仁藤敦史 1992、林部均 1993・1999。

(34)このことについて、『類聚三代格』巻16に収められた詔勅の中に「詔曰…（略）…又皇城都邑，四海之府，万国朝宗，如聞，城闕内外多有穢鼻，良由所司不存檢察，宜自今以後，兩省五府並遣官人及明鋪衛士，嚴加捉搦，隨事科決，若不合与同罪者，録狀上聞。」（詔曰…（略）…又皇城都邑，四海の府，万国の朝宗たり，聞くが如くんば，城闕の内外多く穢鼻あり，良に所司の檢察を存せざるによる，宜しく今より以後，兩省五府並びに官人及び明鋪の衛士を遣わし，厳しく捉搦を加え，事に随いて科決せよ，若し与同罪に合わざれば，狀を録して上聞せよ）とある。『続日本紀』の記事とは若干の異同があり，どちらが本来の詔勅の文章に近いかは判然としない。本稿に関わりのある部分では、『続日本紀』の記事にはみえない「皇城都邑」の語がみえ、『続日本紀』で「京城」とされている部分が「城闕」となっている。

(35)『令集解』巻24、宮衛令の「京城門」の奈良時代末頃の注釈とされる令釈に「謂，羅城門也，釈云，羅城門謂之京城門」（謂うところは、羅城門なり、釈に云う、羅城門は之を

京城門と謂う)とある。つまり羅城門の設けられた条坊域までが京城とされている。

- (36)小澤毅 1997-a, 2003。中村太一 1996, 1999。私は両氏の復元案を必ずしも否定しているものではない。むしろ両氏の藤原京の構造と『周礼』のような中国の古典との関係を指摘する見解には強い共感をおぼえる。ただし、『周礼』冬官・考工記にみえる王城の記載を藤原京の空間構造の中で、外郭である条坊域までを含めて対比する点については、両氏の見解とは大きく異なった認識をしている。そしてこの点は、島嶼部も含めたユーラシア東部地域における都市の本質を考える上できわめて重要な問題が存在すると考える。なお『周礼』と藤原京との関係については、小澤氏や中村氏以前には、千田稔 1982、楠元哲夫 1983 の指摘がある。
- (37)『周礼注疏』巻第 1、天官には、『周礼』にいう王城としての國は、土中である雒邑（後の洛陽）に造営されたものであるとする。雒邑に都が造営されたことと、ここが土中という特殊な場所であることとの関わりは深いと考える。洛陽の重要性や日本の都に対する影響は、従来考えられている以上に大きいのではないだろうか。
- (38)『周礼』に記される西周の王城としての雒邑の構造が、後世に至るまで理想的な王城の姿を示したものであるとされる背景には、これを儒教の聖人である周公の構想によるものであるとする思想とともに、その王城が築かれた場所が天下の中心を示す土中という特殊な場所であったということも大きく関与しているように考える。今後さらに深めていきたい。
- (39)『周書』或いは『周史記』ともいう（なお、『周書』という書名は、北周の正史である『周書』と同名であるため混同されるおそれがあるけれども、両者は全く別の文献である）。『隋書』巻 33、経籍志で「汲冢書」と誤記されたため『汲冢周書』と呼ばれる場合もある。この『逸周書』は、『日本国見在書目録』雑史家にも『周書 汲冢書』という書名でみえる。この『逸周書』作雒解の記載は『芸文類聚』巻 63 の城の項にも引用されている。小島憲之 1962 によると、『芸文類聚』は『日本書紀』編纂に際して参照された可能性の高い文献であるとされる。藤原京の時代に、もし『逸周書』自体はまだ伝来していなかったとしても、『芸文類聚』のこの引用文を通して、当時の人々が理想化された周の雒邑の王城について、その城外に広がる郭（郭）も含めた全体構造を認識することはありえたはずである。なお、この記載にみえる王城の南に川がつらなり、北には山があるという地理的な位置関係は、藤原京の宮域と飛鳥川や耳成山の地理的關係と類似している。藤原京の宮域の選地にあたってはこのような点も考慮されているのではないだろうか。
- (40)『逸周書』のこの記載の逸文はいくつかの文献にみられるが、その逸文を収めている文献によってその記載の細部に異同がある。特に郭の「七十二里」については、「方七十里」もしくは「方七百里」とする文献もみられる。このような『逸周書』の逸文間の異同については、黄懷信、張懋鎔、田旭東 1995 が詳しい。なお本稿では、藤原京の時代に参照さ

れた可能性の高い『芸文類聚』の記載によった。

- (41) 森鹿三 1952 では、『逸周書』作雒解を周の洛陽建設の記録と伝えられるとする。そして、「城方千六百二十丈」とあることについて（逸文によっては、これを 1,720 丈とするものがあることを、1,620 丈の誤記であろうとしている）、これが方九里にほぼ相当し、『周礼』冬官の國が方九里であることと合致することを指摘している。また「郭方七十里」（本稿では先述のように 72 里とする）について、「方」を周回の意味ととらえると『洛陽伽藍記』に記された北魏の洛陽の外郭の「東西二十里南北十五里」の合計である 70 里と合致するとしている。
- (42) 筆者は、漢代以来の郭を都城に含めない古い都城の概念には、『逸周書』（『汲冢周書』）作雒解の記載にみられるような古典的な認識が影響を与えている可能性も考える。
- (43) 王維坤 1997, 井上和人 2003・2005。
- (44) 平城宮の東南隅が欠けたような平面構造について、筆者は唐の洛陽の宮城、皇城、東城などからなる内城部分の東南隅が欠けた形状からの影響を考えている。また平城宮にみられるように、中央区の内裏・朝堂院、東区の内裏・朝堂院が東西に並列する構造も唐の洛陽などからの影響も考える。とりわけ長岡宮では、唐の洛陽を意識して、大極殿を洛陽の正衙である宣政殿に、内裏正殿を乾元殿（則天武后以後、明堂）に擬するような形で、宮室中枢部の構造が設計されている可能性がある。平安京はこの様式を継承しているのではないか。また長岡京と小畑川などとの関係は洛陽と洛河との関係も想起させる。
- (45) 山川均, 佐藤亜聖 2006。大和郡山市教育委員会と劔元興寺文化財研究所の調査によって、平城京の羅城門は京の造営当初には建造されておらず、京城も遷都当初の段階では、南北 10 条であったことが指摘されている。なお、郭壁に新たに重厚な門を 1 門造営することによって、郭の区域までを都城に含める新しい都城の概念の受容を視覚的に示す事例は、先述した南朝の梁の建康における天監年間の國門造営に先例がみられる。
- (46) 『続日本紀』巻 40 の延暦 10 年（791）9 月甲戌の記事には、越前、丹波などの諸国に命じて、平城宮の諸門が壊され長岡宮の造営のために運ばれたとある。平城宮の宮域の門は 12 門であったと考えられ、それが運ばれた長岡宮も 12 門であった可能性が高い。瀧浪貞子 1984 で指摘されているように、平安宮では宮域の門は 14 門となっているが、伝統的な 12 以外の 2 門は土御門（土門）という、構造上格段の違いのある脇門的な門であり、正式の門は 12 門であると考えられていたようである。『周礼注疏』巻 41 の鄭玄の注とそれを敷衍した賈公彦の義疏では、王城の 12 門を「天子十二門」とし、それが十二辰と呼ばれる星座との関わりがあるとする。鄭玄の解釈には、神秘思想的な緯書を思想的に積極的に取り入れている面があり、飛鳥時代の古墳の壁面にみられるような星宿や十二支との関連性も推定される。
- (47) なお、南朝の建康の構造は、百済の都やまたその百済の都の構造を介して日本の飛鳥の

構造に影響を与えている可能性も考えられる。例えば甘樫丘と石頭城、蘇我氏の島の家などのあった島の地域と東府城との関わりを筆者は推定する。ただし、飛鳥の宮室などの構造は、前期難波宮から藤原京、平城京と受け継がれる構造の系譜とは異質な部分が強いと思う。天武が壬申の乱後、すぐに前期難波宮の系譜に連なる藤原京のような構造の都を造営しなかったことは、自己の政権の基盤が盤石になるまでの、伝統的な勢力への妥協的側面があったのではないだろうか。

(48)中国の都市は、元代の録事司の場合などを除いて、行政上都市域のみが区別して管理されずに、周辺の農村と一体的に治められていたという重大で本質的な特徴を有しているとされる（愛宕松男 1938）。この問題は中国における戸口統計の、都市部と農村部を一体的に計上するという特殊性と大きく関わるように思われる。このことの大きな要因として、筆者は、本稿でみてきたように、内城がもともと皇帝の宮やその政権を支える官署や特定の人々の住宅を守るための城塞的な区域であり、郭の区域は本来的に城塞の外部に強制移住や人口の自然流入によって形成された区域として、周辺の農村地帯との中間領域的な区域であったという点に大きな要因の一つが存在すると考える。郭の区域に郭壁が設けられることはあっても、内城の城壁に比べて簡素なものであることも、このような問題と関連するのではないだろうか。世界の他の地域の都市と比較する際にも、この点を押さえた上での考察の必要性を痛感する。この問題については今後さらに深めていきたい。

(49)筆者は日本の宮室中枢部や京城全体の構造の源流として、経学上考えられた周制との関連性を考えている。ここでいう周制とは西周の実態というよりも、『周礼』、『礼記』、『尚書』のような儒教の経書などの中国の古典の記載から、とりわけ漢代以後に経学の中で理想化されて考え出された周代の制度であるといえる。このような周制を古代の日本人は中国の古典を介して受容し、それを日本の実情に合わせて再構成し、前期難波宮や藤原京でみられるような構造を案出したのではないだろうか。平城京以後、周制を基軸として造られた前期難波宮や藤原京以来の構造が、唐制を重層的かつ部分的に受容しつつも発展的に継承されていったと考える。このような周制的な構造は『周礼注疏』巻1、天官の冒頭の部分の鄭玄の注や賈公彦の義疏に端的に記されていると思う。筆者は日本の条里制の起源を条坊制に求め、その条坊の起源をこの天官の部分にみえる「体国経野」（国を体し野を経す）との関連性を考えている。なお、周制などの中国上古の思想と日本の宮都との関わりについては、豊田裕章 2001, 2006, 2007-a をご覧いただければありがたい。

(50)なお藤原京では、内城に相当する通常宮域とされている区域（藤原宮）に都城の重要な指標である12門を配置するなど、内城を都城とする古い都城の概念による空間構成がみられる。このような伝統的な空間構成の受容においては、隋代の大興にみられる、都城の認識に関する過渡的なあり方を勘案するとともに、『逸周書』の記載にみられるような空間構成が、直接的な影響を与えたのではないだろうか。なお、藤原宮の内部は、漢代や南

北朝時代の内城としての都城とは異なって、その内部に住宅地はない。これには、隋代の  
大興にみられるような、内城の内部に住宅地を置かない構造が受容された可能性も考えら  
れる。日本では混乱した情報が伝えられてはいたが、試行錯誤はなされつつも、主体的な  
取捨選択が行われ、当時の日本にとって最も適したあり方が再構成されたのではないか。

(51)『日本三代実録』巻 20, 貞観 13 年 (871) の 10 月 21 日の条に「又称羅城門者, 是周之  
國門」(又羅城門と称するは、是れ周の國門なり) とある。これは大学頭兼文章博士の巨  
勢朝臣文雄の上申の中にみえる。このことから、平安時代の日本においては、羅城門は周  
の王城である國城の門、つまり國門として認識されていたことが理解される。つまり郭城  
である条坊の施工された範囲までを京城(都城)とするように、また國(國城)と認識す  
るようになっているのである。しかし、王城の重要な指標で本来の國門の系譜を引く 12  
門は、本稿で述べたように通常宮域とされている区域(平安宮)に設けられている。また  
平安宮では内蔵寮や大蔵が大極殿や内裏の背後に設けられている。このように配置された  
内蔵寮、大蔵は『周礼』冬官・考工記にいう「後市」に准えられたものであると筆者は  
考えており、これが大極殿などの背後に設けられていることは、平安時代初期においても  
宮域の内部を王城である都城とする認識が根強く存在したことをうかがわせる。

(52)先述したように藤原京で通常宮域とされている区域(藤原宮)が皇城と当時呼ばれてい  
た可能性を指摘したが、養老令の奈良時代末頃の解釈と考えられている『令集解』巻 24,  
宮衛令の「凡京路, 分街立舗」の令釈にも「皇城」の語がみえる。また、次にみるように  
平安時代に至っても、皇城の語が用いられる場合があった。それは藤原実資の日記である  
『小右記』の寛仁 3 年 (1019) 7 月 9 日の条の裏書きにみえる寛仁 2 年 (1018) 11 月 25  
日の太政官符に、賀茂社に寄進された社領を示す際に「四至, 東限延暦寺四至, 南限皇城  
北大路同末, 西限大宮東大路同末, 北限郡堺」(四至, 東は延暦寺四至を限り, 南は皇城  
北大路同末を限り, 西は大宮東大路同末を限り, 北は郡堺を限る) とある。この記事から  
は平安京の一条大路が、「皇城大路」という呼称も有していたことが理解される。この史  
料にみえる「大宮東大路」は、平安宮の宮域の東辺も通過することからこのような名称が  
付けられているようである。このことからみると、一条大路は平安宮の宮域の北辺を通過  
しているので、宮域とされている区域(ここでは平安宮)を皇城とする藤原京以来の認識  
が残っていたため、「皇城大路」と呼ばれた可能性が考えられる。このことから、平安時  
代には、通常宮域とされる区域を皇城とする藤原京以来の認識がまだ存在したようである。  
ちなみに江戸時代の森幸安の描いた地図の中にいくつかの京都周辺の地図がある。これら  
の地図をみると内裏(土御門内裏)とその周囲を取り囲むように存在する公家町が、「皇  
城」と記されている。外周の個々の公家屋敷の牆壁が、この皇城の囲壁として用いられ、  
この区域の内部に出入りするために蛤御門などの門が各所に配置されている。この区域は  
やや擬似的なものではあるものの、伝統的な皇城空間を構成しているといえる。ここで「皇



城」の語が用いられていることについては、公家の漢学的な教養とともに、平安時代に『小右記』で用いられたような皇城の語の用例が継承されていた可能性も考えられる。なお、それらの地図をみると御土居に囲まれた範囲を、それにともなう濠の描写によって正確に追うことができる（ちなみに御土居の内部としての洛中は、「平安城」と江戸時代においても呼ばれる場合があったようである）。このような京都の都市構造の原型は、豊臣秀吉の洛中の整備によるものと考えられ、土御門内裏とその周囲の公家町を「皇城」に、御土居の内部を「平安城」とする建設構想がうかがえる。このような建設構想が案出される背景には、古代以来の日本の都における皇城観や都の空間構成とともに、明代の南京などの空間構成や最外周の郭壁に相当する囲壁を土塁状の土城（土で築かれた城壁の意味）で囲むような、豊臣政権当時にあつて同時代的な中国の大都市の構造が斟酌されている可能性も考えられる。

- (53)明堂や辟雍などの三雍と呼ばれる礼制建築は本来的に都城の南の城外に築くのが原則であつたようである（そうでない場合も、唐の明堂のようにあるが）。各王朝において、これらの置かれている位置が、郭の区域がそれぞれの王朝の国都で都城に含まれるかどうかを検討する上での重要な指標になると考える。唐の長安で、辟雍を継承する太学も含めた国子監が郭の区域に設けられ、日本の平城京や平安京でも郭の区域に比定できる条坊域に大学寮が設けられていると考えられることは、本稿で論じた都城の概念の隋唐時代における段階的变化と密接に関わると考える。
- (54)北宋の開封では、郭の区域までが京城であり國城ともなっている。そしてその郭の区域の外周をめぐる郭壁も、内城の城壁と同等のきわめて堅固な構造のものとなる。これは、開封の立地が險阻な場所でなく、平原の中にあつて騎兵によって攻められやすいという地理的な条件によるところも大きいと思われる。しかし、それとともに、郭を都城の概念に含める建設思想による構造の到達点として、このような郭壁が築かれたのではないだろうか。北宋の開封を境に、それ以後の金、元、明、清というような王朝の都では、逆に内城の内部を都城（京城）として郭を含めないような南北朝以前の空間構成に戻るような点が見えてくる。この問題については別稿で詳しく述べたい。
- (55)唐の長安でみられるような、内城が京城全体の北端に位置し、その外部に広大な禁苑が接する構造は、防御機能とともに緊急のときに皇帝と随従する一団を、密かに京城から脱出させるという機能を有しているように思う。唐で玄宗などが無事に長安を脱出することができたのは、禁苑の存在によるところが大きいと思われる。このような皇帝の避難経路としての庭園の有する機能は、宮に接する苑においても、皇帝が目立たない形で宮から脱出する経路として有効に機能したのではないだろうか。このように秘密裏に脱出する経路としての庭園の機能は、中国の都や宮に限らず、庭園自体の普遍的な機能の一つとして考えることができるのではないかと。例えば名古屋城の深井丸や江戸城の吹上などの日本の近



世城郭における庭も防御性とともにもそのような機能を有している可能性が考えられる。なお、唐の長安で内城が京城全体の北端に位置することも、防御性のみでなく皇帝が目立たない形で脱出する上でも重要な要素であると思う。これに対し北宋の開封や明の北京のような入れ子状の構造は、一見防御性が高いようにみえるが、逆にいえば逃げ道のない構造であるともいえる。

(56)遠藤慶太 2002。

(57)遠藤慶太 2002。

(58)金子修一 1982

(59)この附論の部分は、豊田裕章 2007-b の抄録に新しい所見を加えて記したものである（なお、本稿に掲載させていただいた『異朝明堂指圖記』の写真は、石清水八幡宮の御許可を得て、皇學館大学から提供していただいたものである）。

## 〔参考文献〕

### 日本語

- ・秋山日出雄 1984「南朝都城『建康』の復元序説」樞原考古学研究所編『樞原考古学研究所論集』第7, 吉川弘文館。
- ・新宮学 2004『北京遷都の研究』汲古書院。
- ・井上和人 2003「藤原京・平城京造営の実像」『古代都城制条里制の実証的研究』学生社, 2004年所収。
- ・井上和人 2005「古代東アジア都城形成研究の新視覚—藤原京・平城京・渤海上京龍泉府そして長安城—」『条里制・古代都市研究』第21号。
- ・宇野隆夫 2005「王権の空間編成と国家形成—中国歴代の城市遺跡から—」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社。
- ・遠藤慶太 2002「『日本後紀』の諸本と逸文」『平安勅撰史書研究』皇學館大学出版部。2006年に増補所収。
- ・小澤毅 1997「古代都市藤原京の成立」『日本古代宮都構造の研究』青木書店, 2003年所収。
- ・小澤毅 2003「藤原京の造営と京城をめぐる諸問題」, 『日本古代宮都構造の研究』青木書店, 2003年所収。
- ・王維坤 1997『中日の古代都城と文物の研究』朋友書店。
- ・愛宕元 1991『中国の城郭都市』中央公論社。
- ・愛宕元 1981「両京郷里村考」『唐代地域社会史研究』同朋舎出版, 1997年所収。
- ・愛宕松男 1938「元代都市制度とその起源」『愛宕松男 東洋史学論集』第4巻, 三一書房, 1988年所収。
- ・加賀栄治 1964『中国古典解釈史—魏晋篇』勁草書房。

- ・金子修一 1982「中国一効祀と宗廟と明堂及び封禪」『古代中国と皇帝祭祀』汲古書院, 2001 年所収。
- ・岸俊男 1976「日本の宮都と中国都城」『日本古代文化の探求 都城』社会思想社, 1988 年所収。
- ・楠元哲夫 1983「藤原京の京城」『橿原市 院上遺跡』奈良県文化財調査報告書第 40 集, 奈良県教育委員会。
- ・氣雅澤保規 2005『絢爛たる世界帝国 隋唐時代』講談社。
- ・五井直弘 1987「中国古代の都城」『中国古代の城郭都市と地域支配』名著刊行会, 2002 年所収。
- ・小島憲之 1962『上代日本文学と中国文学 上』塙書房。
- ・小林聡 2005「泰始礼制から天監礼制へ」『唐代史研究』第 8 号。
- ・佐藤武敏 1971『長安』近藤出版社。
- ・佐原康夫 1995「漢長安城再考」『漢代都市機構の研究』汲古書院, 2002 年所収。
- ・佐原康夫 1999「漢長安城の空間構造と都城制度」『漢代都市機構の研究』汲古書院, 2002 年所収。
- ・妹尾達彦 2001『長安の都市計画』講談社。
- ・千田稔 1982「歴史地理学における『復原』から意味論へ—藤原京を事例として—」『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店, 1991 年所収。
- ・外村中 1998「六朝建康都城宮城攷」京都大学人文科学研究所編『中国技術史の研究』京都大学人文科学研究所。
- ・瀧浪貞子 1984「初期平安京の構造」『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版 1991 年所収。
- ・谷川道雄 1971『隋唐帝国形成史論』筑摩書房。
- ・田中淡 1989『中国建築史の研究』弘文堂。
- ・辻垣晃一・森洋久編著 2003『森幸安の描いた地図』国際日本文化研究センター。
- ・寺崎保広 2002『藤原京の形成』山川出版社。
- ・豊田裕章 1998「中国都城制に関する一考察—「宮」・「城」・「郭」という言葉を中心に—」網干善教先生古希記念会篇『網干善教先生古希記念考古学論集』網干善教先生古希記念会。
- ・豊田裕章 2001「前期難波宮と『周制』の三朝制について」『ヒストリア』第 173 号。
- ・豊田裕章 2002「隋唐代における「都城」の概念の変化について—日本の宮都との関係を含めて—」『条理制・古代都市研究』第 18 号。
- ・豊田裕章 2003「中国における都市城壁の問題について—南北朝時代から隋唐時代の宮都を中心として—」『郵政考古紀要』第 33 号, 通巻 42 冊。
- ・豊田裕章 2007-a「藤原京の宮域と王城（國）との関わりについて」『古代文化』59-2。
- ・豊田裕章 2006「前期難波宮の小柱穴について—裳階という観点から—」日本書紀研究会

編『日本書紀研究』第27冊，塙書房。

- ・ 豊田裕章 2007-b 「石清水八幡宮所蔵『異朝明堂指圖記』と阮謙『周室王城宗廟明堂圖』  
『皇學館大学史料編纂所所報 史料』第208号，皇學館大学史料編纂所。
- ・ 杜玉生 1993 「北魏洛陽外郭城の発見と研究」 日中共同研究会『日中都城制研究の現状』  
Ⅱ，奈良国立文化財研究所・中国社会科学院考古研究所。
- ・ 礪波護 1987 「中国都城の思想」『都城の生態』所収，中央公論社。
- ・ 内藤乾吉 1963 「唐六典の行用に就いて」『中国法制史考證』有斐閣。
- ・ 奈良文化財研究所 1976 「藤原宮第18次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6，奈良国  
立文化財研究所。
- ・ 中島比 1985 「大興城の郭壁」『東洋史苑』第24・25合併号。
- ・ 中塚良・豊田裕章 2005 「古代景観形態学の試み—長岡宮『宝幢』パースペクティブ実験  
を例に一」立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集Ⅳ』立命館大学考古学  
論集刊行会
- ・ 中村圭爾 1988 「建康の『都城』について」唐代史研究会編『中国都市の歴史的研究』刀  
水書房。
- ・ 中村圭爾 1984 「建康と水運」中国水利史研究会編『佐藤博士退官記念中国水利史論叢』  
国書刊行会
- ・ 中村圭爾 2005 「建康，その伝統と革新」『アジア遊学』78。
- ・ 中村圭爾 2006 『六朝江南地域史研究』汲古書店。
- ・ 中村太一 1996 「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』582号，吉川弘文館。
- ・ 中村太一 1999 「藤原京の条坊制」『日本歴史』612，吉川弘文館。
- ・ 仁藤敦史 1992 「倭京から藤原京へ」『古代王権と都城』吉川弘文館，1998年所収。
- ・ 林部均 1999 「条坊制導入期の古代宮都」『古代宮都形成過程の研究』青木書店，2001年所  
収。
- ・ 林部均 1993 「藤原京関連条坊の意義」『古代宮都形成過程の研究』青木書店，2001年所収。
- ・ 林部均 2008 『飛鳥の宮と藤原京』吉川弘文館。
- ・ 平岡武夫 1956 『唐代研究のしおり6 唐代の長安と洛陽』京都大学人文科学研究所。
- ・ 村元健一 2007 「前漢皇帝陵の再検討—陵邑，陪葬の変遷を中心に—」『古代文化』59-2。
- ・ 森鹿三 1952 「逸周書作雒解と北魏大洛陽城」『東洋史研究』11-4。
- ・ 山川均・佐藤亜聖 2006 「下三橋遺跡の発掘調査について—古代都市平城京に関する新知  
見」『条里制・古代都市研究』第22号。
- ・ 山中章 1993 「条坊制の変遷」『日本古代都城の研究』柏書房，1997年所収。
- ・ 楊寛著・西嶋定生監訳，尾形勇・高木智見共訳 1987 『中国都城の起源と発展』学生社。
- ・ 劉慶柱 2003 「中国古代都城史の考古学的研究—都城・宮城・宮殿そして宮苑問題につい

て一」奈良文化財研究所編『東アジアの古代都城』吉川弘文館。

## 中国語

- ・中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊 1973「漢魏洛陽城初步勘查」『考古』1973-4。
- ・中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊 1978「漢魏洛陽城南郊的靈台遺址」『考古』1978-1。
- ・中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊 1998「漢魏洛陽故城 城垣試掘」『考古學報』1998-3。
- ・陝西省文物管理委員会 1958「唐長安城地基の初步探測」『考古學報』1958-3。
- ・劉慶柱，李毓芳 2003『漢長安城』文物出版社。
- ・黃懷信・張懋鎔・田旭東撰 1995『逸周書彙校集注十卷 佚文一卷』上海古籍出版社。
- ・盧海鳴 2002『六朝都城』南京出版社。
- ・鄭振鐸編 1984『新定三礼図 二十卷 聶崇義集注』（宋淳熙二年本影印本）上海古籍出版社。
- ・中国美術全輯編輯委員会編 1988『中国美術全集 繪畫編 18 畫像石畫像磚』上海人民美術出版社。
- ・王仲殊 1982「中国古代都城概説」『考古』1982-5。

## 英語

- ・Ellen Van Goethem 2008 “Nagaoka Japan's Forgotten Capital” BRILL.

### 〔謝辞〕

本稿の内容については，2007 年度の国際日本文化研究センターの共同研究班である「古代東アジア交流の総合的研究」の班会ならびに大阪大学歴史教育研究会の例会，2008 年の日本史研究会の例会で発表した内容をまとめたものである。

本稿の成稿にあたっては，中国西北大学の王維坤氏，国際日本文化研究センターの宇野隆夫氏をはじめ「古代東アジア交流の総合的研究」班，大阪大学歴史教育研究会，日本史研究会のみなさまのご教示を得ることができた。ここに記して謝意を表したい。ありがとうございました。